

中野遺跡発掘調査報告書

—富田林市若松町所在—

1979

富田林市教育委員会

中野遺跡発掘調査報告書

—富田林市若松町所在—

昭和五十四年十月

富田林市教育委員会



Color plate 中野遺跡出土遺物（石包丁，石鎌，石劍）

本文目次

はじめに

例　　言

第1章	調査経過	1
第2章	位置と現況	6
第3章	遺構	14
	1. 概観	14
	2. 層位	14
	3. 遺構各説	16
	4. 小結	22
第4章	遺物	25
	1. 概観	25
	2. 遺物各説	27
第5章	考察	46
	1. 遺跡の立地条件の復元的考察	46
	—とくに石川中流域の先史遺跡の立地について—	
	2. 中野遺跡出土遺物の螢光X線分析	54
あとがき		60
参考文献一覧		63

図 版 目 次

- 巻頭カラー 遺物写真（石包丁、石鎌、石剣）
- P L 1 位 置 図（中野遺跡各調査地点と
周辺の遺跡）
- 2 " (中野遺跡の周辺—富田林市
都市計画図其ノ5一部分)
- 3 造構実測図（北部造構）
- 4 " (南部造構)
- 5 " (S B 001)
- 6 " (S B 002)
- 7 " (S B 003)
- 8 " (S B 004)
- 9 " (S B 005)
- 10 " (SK 001, SK 002)
- 11 " (SE 001, SE 002)
- 12 遺物実測図（円板状土製品、石剣、
石包丁、不定形石器）
- 13 " (石鎌、石槍、不定形石器)
- 14 " (不定形石器、石核、剥片)
- 15 " (弥生式土器)
- 16 " (弥生式土器、砥石)
- 17 " (弥生式土器、土師器)
- 18 " (須恵器)
- 19 造構写真（遺跡の遠望—南から、
同上—東から）
- 20 " (北部造構全景、
南部造構全景)
- 21 " (北部造構細部—南から、
同上—西北から)
- 22 " (北部造構全景—西から、
同上近景—西方部分)
- 23 " (南部造構全景—西から、
同上細部—北から)
- 24 " (北部造構全景、
S B 002 細部)
- 25 " (SD 002, SD 002, 3細部)
- 26 " (SK 001, SK 002)
- 27 遺物写真（石包丁、石剣、円板状土製品）
- 28 " (石鎌、未製品)
- 29 " (石槍、未製品、不定形石器)
- 30 " (不定形石器)
- 31 " (剥片など、原石、石核など)
- 32 " (弥生式土器)
- 33 " (弥生式土器、土師器)
- 34 " (須恵器)

挿 図 目 次

- fig. 1 北部造構 造構検出風景 3
- 2 調査中のスナップ 4
- 3 中野遺跡区画割図 5
- 4 嶽山採集の皮はぎ 7
- 5 喜志遺跡検出の堅穴式住居跡 8
- 6 大師山遺跡第1号住居址実測図 10
- 7 大師山古墳地形測量図 10
- 8 中野遺跡東側壁断面実測図 15
- 9 井戸2 (SE 002) 全景 18
- 10 石包丁出土状況 20
- 11 石剣出土状況 20
- 12 溝1 (SD 001) 調査風景 21
- 13 今回調査部分と周辺の現状測量図 22
- 14 中野遺跡中心部 (D-2区)
—調査地から北東を望む— 23
- 15 石錐実測図 29
- 16 出土遺物拓影および実測図 42
- 17 土師質土器写真 44
- 18 中野遺跡周辺の地形復元図 48
- 19 石川中流域の地形
(富田林市都市計画図より作成) 50
- 20 生駒山麓の地形 (石神怡「八尾市
(龜井遺跡発掘調査概要) 1971より) 53

表 目 次

- table 1 石川中流域の弥生遺跡分布一覧 13
- 2 各造構出土遺物一覧 25
- 3 石劍、石包丁の材質について 30
- 4 石核、剥片 (SE 002, SE 001
出土分のみ) の計測値 33
- 5 石器 (サヌカイト) の分析結果 56
- 6 石器、須恵器、弥生式土器
土師器の分析結果 56
- 7 各原産地における原石群の
元素比の平均値と標準偏差 57

はじめに

この報告書は、本市若松町地内の住宅開発に伴う緊急発掘調査の報告書であります。

この一帯は、本市において最も早く確認された弥生時代の遺跡である中野遺跡の周辺地域であり、従来から何らかの遺跡があるのではないかと考えられておりました。

この地を宅地として開発されることになった株式会社光陽住建ならびに富士産業株式会社の格別のご配慮により緊急発掘調査を実施しましたところ、幸い以下詳しく述べ報告致しますように多くの成果をあげることができました。

ここに両社およびこの調査に色々とご指導賜わりました神戸商船大学教授北野耕平氏ならびに直接調査を担当していただきました大谷女子大学講師中村浩氏に深く感謝申し上げます。

昭和54年10月

富田林市教育委員会

教育長 岩井好一

例　　言

1. 本書は、富田林教育委員会が、原因者負担事業（㈱光陽住建、富士産業株式会社）として計画し、大谷女子大学資料館の協力を得て担当実施した。富田林市若松町所在中野遺跡発掘調査事業の報告である。
2. 調査に当っては、大谷女子大学文学部中村浩講師を担当者とし、神戸商船大学北野耕平教授を調査指導者として仰いだ。調査は、昭和54年8月現地調査を終了した。この間、大阪市立大学学生・積山洋、市場健次、花園大学学生・青木昭和、滋賀大学学生・山本与志人、大谷女子大学考古学研究同好会(山本百合子、和田治子、山口さゆり、福原聖代他) 同OB (真鍋まゆみ、西垣ひかる他) 大谷女子大学資料館職員・福田直子の諸氏の他、大谷女子大学博物館実習受講生67名の参加があった。また富田林市教育委員会からは山野茂敷氏他の参加があり、大阪府教育委員会からも現地で有益な助言、援助をいただいた。さらに㈱光陽住建、森本設計㈱、㈱村本土木興業をはじめ、地元の方々の協力を得た。ここに記して謝意を表したいと思う。
3. 出土遺物の整理は、大谷女子大学資料館において、昭和54年7月25日から実施し、9月20日終了した。その間、積山洋、市場健次、青木昭和、忍薰、山本百合子、福原聖代、森田幸子、福田直子の各氏の参加協力を得た。併せて謝意を表したいと思う。
4. 本書の執筆は、各々文末に記す者が当ったが、全体としての統一編集は中村浩が行った。なお英文訳出については、大谷女子大学文学部地村彰之講師をわざらわせた。図版および挿図の実測は、整理作業参加者全員が当り、製図は主として中村が行い、忍薰、山本百合子氏の協力を得た。

第1章 調査経過

1. 調査にいたる経過

中野遺跡は、富田林市の中央部よりやや北寄りに位置し、弥生時代中期の遺跡として早くからその存在が知られていた。しかしながら、本格的な調査の機会を得ず、ただ多くの石器片、土器片が出土することなどから、遺跡の主要部分はその東北方に位置するものと予見できるにとどまっていた。

昭和53年9月1日～11日、大谷女子大学の中村浩講師の手によって、その主要部分とされている地区に近接した地区的学術調査が行なわれた。調査面積は約16m²と狹少ながら多数の出土物の中に、弥生式土器などのほか、石器についてはいずれもサスカイトで、原石から製品に至るまでの加工工程をたどる事ができる資料が一括して検出され、注目された。

中野遺跡周辺における開発の波は最近特に顕著になってきており、周知の包蔵地の縁辺確認も急務となっていました。その時期に遺跡の主要部分と思われる部分に比較的近い東南端で開発の申請があった。

申請者は同地の所有者である、㈱光陽住建・富士産業㈱の2者で、開発面積は、2736m²と申請されていた。

市教委はただちに2者と協議に入り、とりあえず開発予定地の試掘調査を行なうこととするよう協力を要請した。

試掘調査は、本市文化財調査会の考古学担当委員でもある、神戸商船大学教授北野耕平氏に依頼し、3月12日実施した。

調査方法は、東西方向に長さ60cm巾1mの主トレーニチを設定し、この東端から25m離れた主トレーニチの中間で直角に支トレーニチを南北方向に長さ25m穿った。深さは0.6～1mとなった。

その結果、「造成予定地の西半は試掘によると細流をもつ低湿地で遺構を認めず、また遺物の集中的な散布は認められない。しかし東半は相当範囲に亘って包含層の分布があり、遺物の集中的な遺存もあって、集落関係跡と判断し得る。この地域は造成に先立ち調査する必要があると考えられ、遺跡としては中野遺跡の西端に位置す

るものとして、集落環境を考察するうえで重要である。」という参考意見を得るに至った。

これによって市教委は全面発掘の必要性を認め、中野遺跡縁辺の確認という意味も含め、開発者に対し、調査に関する協力を求め、了解を得た。さらに遺跡の性格をより明らかにするために、開発者所有の隣接地、残り約896m²についても継続して発掘することで合意に達した。

調査は、昭和53年に、今回の開発該当地から数百米離れた位置で発掘調査を実施した経験をもつ、大谷女子大学講師中村浩氏を担当者とし、北野耕平氏の指導を仰ぎながら、同大学考古学研究同好会会員の協力も受け、昭和54年3月30日開始されるに至った。

2. 調査組織および経過

富田林市教育委員会の依頼をうけ、大谷女子大学では、昭和54年3月30日から8月までの予定で発掘調査を行なうこととなった。調査に当っての調査組織の編成は以下の如くであった。

調査主体 富田林市教育委員会

調査主体者 岩井好一（市教育長）

調査指導 北野耕平（市文化財調査会考古学担当委員、神戸商船大学教授）

調査担当者 中村 浩（大谷女子大学講師）

調査員および補助員 積山洋、中村善法、田島郷史、市場健次、青木昭和、山本与志人、福田直子、山本百合子、和田治子、山口さゆり、福原聖代、その他多数

調査事務担当 富田林市教育委員会 社会教育課、和田一三、山野茂数

調査協力 大谷女子大学考古学研究同好会

大谷女子大学博物館実習受講生

調査はまず北部の造成が完了していた盛土部分から実施した。特に造成時にコンクリートなどの大きなブロックの埋没のため機械による掘穿も思うにまかせないという状態であったが、一応攪乱が比較的少ない部分についてのみ調査を実施した。

なおその外の各部にもテストピットを設定し、攪乱状況を確認したが、いずれも調査に耐えうるものではなく、割愛せざるを得なかった。

さらに担当者の都合から、5～6月の間は現地作業を中断し、7月15日から再び残りの南部分についての調査を実施した。盛土もなく、北部分よりは、かなり作業もはかどったが、既に開墾による削平が著しく、当初予想した以上の成果は望むことができなかった。調査の日々の各段階については、次に記述する日誌抄を参考にされたいと思う。現地調査はひとまず7月31日で終了したが、なお埋め戻しやその他の整理のため若干の日数をとらざるを得なかった。遺物整理は調査の後半に当る7月28日から大谷女子大学資料館において実施し、水洗、注記、接合、復元をはじめ、実測、製図などの仕事を9月20日まで行なった。

3. 日誌抄

- 3月30日 現地集合。調査地の確認を行なう。
- 31日 午後から盛土および表土除去作業を行なう。表採遺物として、須恵器、サヌカイト片、土器片などがある。
- 4月1日 表土除去作業、平行して表土除去された部分の遺構検出作業。いくつかのピットの存在を確認。遺物片多数出土。
- 2日 前夜の雨のため、排水に追われる。表土除去作業を続行。
- 3日 表土除去後、調査のうち、北部に著しい攪乱があることが判明。コンクリートブロックのため作業進まず。
- 4日 遺構検出作業。一部分に遺構のピット配列まで確認しうるようになる。北部の攪乱部分の追求を断念し、テストピット設定を行なう予定。
- 5日 遺構検出作業。表土除去作業は本日で完了。
- 6日 遺構検出作業。夕方遣



fig. 1 北部遺構 遺構検出作業風景

構にホワイトを入れ、現状の写真撮影。

- 7日 ピット内土砂除去作業。土壤実測を開始する。
- 8日 前日につづき、ピット内土砂除去作業。午後激しい降雨のため、遺物を大谷女子大学へ撤収する。
- 9日 排水作業。地区設定、井戸実測完了。
- 10日 実測準備を行なう。遺構の精査。
- 11日 割りつけ作業を行い、午後一部実測作業。大谷女子大学佐藤 恵学長來訪。
- 12日 実測完了。写真撮影、神戸商船大学北野耕平教授來訪。
- 13日 進入路にトレンチ設定。ただちに実測、写真撮影を行ない、埋め戻す。北部遺構調査完了。機材を撤収する。
- 7月15日 南部遺構表土除去開始。周辺の表面採集を行なう。
- 16日 表土除去続行。石列が検出される。
- 17日 表土除去続行。遺構検出開始。
- 18日 表土除去完了。遺構検出続行。写真撮影。実習生参加（20名）
- 19日 遺構検出続行。ピット内土砂除去作業。仮に石列を用いて地区設定を行なう。それに中央石列の南をA、北をB、西をCと各々するものである。
- 20日 ピット内土砂除去作業。遺構検出作業。C区で溝状の遺構検出。略測図を作成。
- 21日 遺構検出作業。ピット内清掃。遺構西にトレンチを設定する。湧水著しく、また何ら包含層を認めないものであり、写真撮影、実測の後、埋めもどす。この部分が小字名、「小池」に該当する部分の可能性大。
- 22日 遺構清掃作業。写真撮影。井戸、溝の検出。方形周溝の一部を確認。



fig. 2 調査中のスナップ



fig. 3 中野遺跡区画割図

- 23日 神戸商船大北野耕平教授來訪。遺構清掃作業。磨製石剣出土。
- 24日 遺構清掃および精査を実施。全面の写真撮影。割りつけ開始。
- 25日 割りつけ作業。一部遺構精査を続行。
- 26日 実測作業。
- 27日 実測作業。
- 28日 実測作業。大谷女子大学竹下喜久男教授來訪。
レベル測定。大谷女子大学資料館で内業開始。
- 29日 実測作業。調査完了。遺物整理。
- 30日 機材撤収。埋め戻し作業開始。遺物整理。
- 31日 埋め戻し作業。遺物整理。

8月1日～9月20日

遺物整理（復元、接合、実測、製図）、報告書原稿作成（一部9月上旬に印刷社へ原稿を渡す）

以上

第2章 位置と現況

中野遺跡は、富田林市若松町五丁目、中野町一丁目、二丁目を中心とする地域にひろがる弥生時代中期から歴史時代にわたる複合遺跡である。遺跡は、海拔50～60m前後の石川西岸にひろがる河岸段丘に占地するもので、現在の地形から旧地形を推定すると、ほぼ東南方向にのびる舌状の台地上に該当することがわかる。

台地から東方にあたる低地溝帯を北流する石川は、中野遺跡の東南部分で東条川と合流し、大きく蛇行している。この沖積地に接した西岸あるいは東岸にあたる水田の畔線をみるとかっての氾濫の跡を明確に看取しうる。

さて、当該遺跡の所在する石川中流域から南地域にかけての遺跡分布は、どのような様相を呈しているのだろうか。石川流域の北端で大和川と合流する藤井寺、羽曳野市周辺の各遺跡は、すでに早くから調査の手が加えられ、その実態の究明もそれ相当の進行がみられる。

しかし、当該地周辺においては、いまだその手が十分に及んでいないとはいえないものがある。以下に各時代をおおって石川中上流域の遺跡分布と現状について記述していくこととする。

まずはじめに先土器、縄文、弥生の各時代の遺跡分布についてみたいと思う。先土器時代、当地域での発見例は現在のところみられず、その出現は下流域の羽曳野平野の藤井寺市青山遺跡まで南下せざるを得ない。次いで縄文時代に入ると前期の遺物を出土した富田林市錦織遺跡が著名である。遺跡は石川の西岸にひろがる河岸段丘上で南北300m、東西200mの範囲に遺物の散布がみられる。本格的な調査が行われておらず詳細は不明であるが、採集された遺物は、いずれも前期様式で、北白川下層Ⅱ・Ⅲ式、大歳山式に区分されるものである。また石器は凹基無茎式の三角形を呈するもので、土器と同一時期と考えられている。

この錦織遺跡から西北約500mに位置する原田遺跡では土器はみられないが石器、石匙などがある。それらの中に縄文時代に属すると考えられる遺物が分布調査で採集されている。恐らくは地域的にも近接しており両者は関連のある遺跡と思料されるが後考をまちたい。石川から東北に派生する佐備川の上流域、竜泉には石器・サ

ヌカイト片を多数出土する佐備川遺跡がある。現状は水田で、性格、内容ともに不明であるが、少なくとも遺物からの判断では縄文時代として大過ないと考えられている。

さらに本遺跡の西にそびえる嶽山の尾根附近では、皮はぎあるいは石匙と考えられる石器が表面採集されており、同時に数点のサヌカイト片もみられた。これらも先の原田遺跡などと地域的にも近接しており関連の求められるものである。またこの嶽山を越えると石川を挟んで既述の錦織遺跡があり、いわば狩猟段階にある当時の生活状況から考えると、その行動範囲の中に含めてよいのかもしれないが、今後資料の増加をまって再考したい。

同様に錦織遺跡から丘陵を越えて西方約2kmの地点に寺池遺跡がある。富田林市寺池台を中心とする南北400m、東西400mの範囲で石器などが多数採集されている。この遺跡は谷や丘陵のいわゆる自然境界による区分によると全く別個とするのが妥当なのかもしれない。また石川東岸の富田林市伏見堂でも縄文式土器と多数の石器が採集されたとあるが、その詳細については明らかでない。

さらに上流域の河内長野市域では大量に縄文時代遺物が採集されたということは、知られていない。わずかに河内長野市楠町東所在の菱子尻遺跡で縄文時代の可能性を有する石匙が一点出土しているにすぎない。この遺跡は、とくに集落跡などの遺構を確認したものではなく、自然流水路を認めたにすぎないものであり、それら遺物は恐らくは、近接地域からの流入品である可能性が濃いと考えられる。

ともあれ、縄文時代前期の生活痕跡を残す錦織遺跡の外はいずれもその実態が明らかではない。とくに土器の検出がないところから推測すると単なるキャンプサイトの可能性もある。また錦織遺跡が長期間にわたって継続したものでなく单一時期に近い短期間にそこを生活場所としている点は、注目されるだろう。

石川流域の縄文時代中期以降の遺跡は羽曳野市東阪田所在。東阪田遺跡で晚期縄文式土器片と石器などが出土している以外は、石川の上、中、流域の範囲では全くみられない。この状況を単に未調査のため遺跡発見の可能性ありとするのか、人間

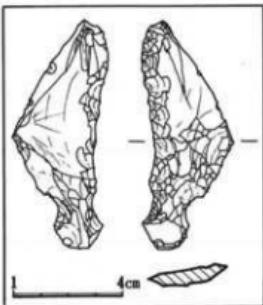


fig. 4 嶽山採集の皮はぎ

の移動を考えるのか問題があろう。

弥生時代に入って農耕社会の出現とともに石川中流域にもその開墾の鐵が入った可能性もあるが、現在のところ弥生時代前期にまで遡りうる遺跡は確認されていない。

ようやく当該地域で弥生時代の生活のあとをみるのは中期（唐古第Ⅱ～Ⅲ様式）の段階になってからである。

喜志遺跡は石川西岸にある台地上に位置するもので南北 500 m、東西 200 m に遺跡分布を認める大規模なものである。すでに1910年代にその存在が注目されていたところであるが、本格的調査の手は入っていない。しかし、市教委、あるいは府教委による調査でその実態の一部を知る手がかりがかなり増加しつつある。市教委による調査では、竪穴式住居と V 字溝が、また府教委の調査では、円形および方形プランを呈する竪穴式住居などが検出されている。とくに後者の府教委調査にかかる第2地区と呼称された部分がある。円形プラン 3、方形プラン 1 の住居跡の他、多数のピットが確認されている。またこの地の東端には、V字溝がみられる。とくに



fig. 5 喜志遺跡検出の竪穴式住居跡（渡辺昌宏、芝野圭之助「喜志遺跡発掘調査概要」
大阪府教育委員会、1978による）

この地からほどんど距離をすぎた東では、地形的にも下る状況が看取され、いわば台地端と考えても過言ではない部分である。当時の住居立地の様子がよく判る。遺物は、弥生式土器を中心とし、土師器、石器（石包丁、石鎌、石錐、石槍）、土製品

などがある。とくに弥生式土器は、いずれも唐古第Ⅲ様式に属するものであることは注目される。

この喜志遺跡の南約1.5～2kmに中野遺跡が所在する。中野遺跡も前者と同様、かなり以前から知られているもので、その報告が明治25年までさかのぼる遺跡である。しかし、それも1970年同地内で温室ハウス建設に伴う工事によって再び遺跡が発見されるまで、殆んどその存在が忘れられていたとしても過言ではない。この外にもいくつかの調査が行われている筈であるが、その報告に接していないため内容は、不明といわざるを得ない。

1970年に市教委による試掘によって、弥生土器と石槍、石包丁、石鎌などの遺物が多數採集された。遺跡の範囲は、南北300m、東西200mの範囲と考えられており、1978年大谷女子大学による調査で、市教委の試掘によって確認されていたV字溝の西への延長を確認し、さらに同様にサヌカイト原石および加工途上にある石器、あるいは剝片、弥生式土器を多數採集した。これによって当該遺跡が大規模な石器加工場を伴っていたということを想像させるにいたったのである。

加えて今回の調査によって住居跡などの集落の跡と、さらに方形周溝墓の一部という痕跡程度であったが墓域の存在も推定されるにいたった。すなわち、当該地が一大生活遺跡であった可能性を一層発展させて考えることが出来るようになってきたのである。さらに同地では、先の大谷女子大学の調査で得た石器加工場を伴っていたとの知見を否定する材料は全くなく、むしろそれを積極的に肯定する資料増加があったことは、注目に値するだろう。

これら以外の石川流域の弥生時代遺跡は、いずれも発掘調査をへたものではないが、地域的にあげると、上流域では、塩谷遺跡が中期の単純遺跡として知られている。塩谷遺跡は、石川西岸段丘面に位置し、河内長野市木戸町に属する。遺物の散布範囲が東西500m、南北500mとかなり広範で、その中央を塩谷川が石川へと流れている。遺物は弥生式土器(壺、甕、高杯)、石器(石包丁、石鎌、石槍、石斧)などがあり、時代は弥生時代中期(唐古第Ⅲ様式)である。

この外には、河内長野市三日市町に所在する後期の大師山遺跡が上流域では調査が行われ、その性格内容が判っている遺跡である。この大師山遺跡は高地性集落と

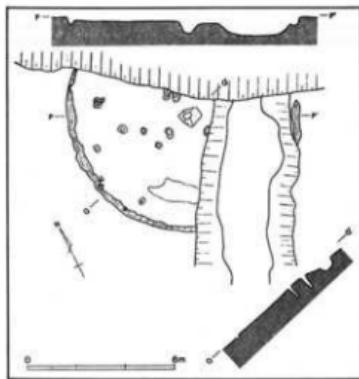


fig. 6 大師山遺跡第1号住居址実測図
(関西大学「大師山」1978所収)

分類呼称されるもので、石川中流域東岸の河南町東山遺跡、あるいは上流の富田林市滝谷遺跡などは、これに属するものである。

以上記述した他に弥生時代の遺物が散布する地域は若干みられるが、それらを一々説明するだけの資料も紙幅もない。従って上流域の弥生遺跡についてその所在と立地、遺物さらに種類がわかっているものについては、それも加えたものを表(table 1)として本章の末尾に附しておくことでその責をまぬがれたいと思う。

古墳時代に入った頃の石川上流域にあっては、先に述べた河内長野市三日市町大師山の大師山古墳、富田林市廿山の廿山古墳、さらに富田林市新堂の真名井古墳、同市宮の鍋塚古墳等が石川西岸の台地に面

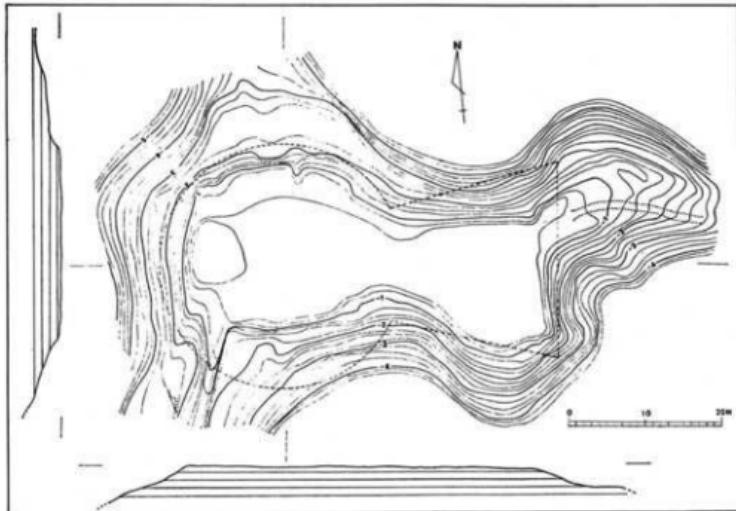


fig. 7 大師山古墳地形測量図 (関西大学「大師山」1978所収)

した羽曳野丘陵上に形成された前期古墳である。そのうち中野遺跡に最も近い真名井古墳は、全長60m、後円部径40m、前方部幅20m、後円部高5m、前方部高1mをはかる丘陵端に築かれた前方後円墳であった。内部主体は粘土櫛で、三角縁三神三獸鏡、平縁の鏡片、碧玉製管玉、鉈、錐などの工具、鐵鐵、槍などの武器と石製紡錘車などが出土し、4世紀末頃の築造と考えられている。さらに北方の神社内には全長58mをはかる前方後円墳の可能性を有する小丘が所在する。

また石川東端には石川の支流、佐備川に面して板持古墳群が前期から後期にかけて形成され、さらに東条川の西岸には西大寺山古墳、ツギノ木山古墳などの古墳がみられる。とくに板持古墳は、全長40mをはかる前方後方墳であり、遺物には小形重圓文鏡、鉄製短劍など品目は限られていて、とくに目立ったものはみられないが、当該地の氏族動向を知る資料として注目されている。

一方、集落遺跡についてもそれら古墳を仰ぐ下方の台地、平野上に多く遺物散布地がみられるが、いずれも調査をへておらず、その内容については不明とせざるを得ない。

やがて時期の下降とともに古墳の小型化と、さらには横穴式石室の採用とともに群集墳とよばれる多数の群をなす古墳の築造が開始される。石川中流域でも、その例にもれず、内部構造は横穴式石室ではないが、その初見的なものに、先述の板持古墳群などがある。さらに真名井古墳の北、美具久留御魂神社境内の宮神社裏山古墳群（1～4号墳）、北方の平古墳群、また南方の宮前山古墳群（1～3号墳）、また終末期古墳として横口式石棺を主体とするお亀石古墳などが各々この時代の古墳として所在する。さらに南方の錦織西方にひろがる丘陵には、南坪池古墳、堂ノ山古墳などが知られている。とくに南坪池古墳は、横穴式石室で同心円叩きを有する壇を伴う特異なものである。

一方、石川東岸の台地には、富田林市伏見堂に西野々古墳群（1～5号墳）、嶽山の中腹部分の丘陵斜面に田中古墳群（1～5号墳）、さらに同市横山に嶽山古墳群（1～23号墳）がそれぞれ分布している。それらのいくつかは開口しているものがあり、その主体が横穴式石室であることが判る。また先に紹介した石川支流の東条川上流には双円墳として著名な金山古墳が、また同じく後期の森屋古墳群、御旅所北古墳

などが所在する。

さらに上流の河内長野市域にも塚穴古墳、鳥帽子形古墳、五の木古墳などが各々所在するが、群としてのまとまりを有するものではない。それらに伴う集落跡についてはいずれも未調査であり、単に散布地として知られているにすぎない。たとえば富田林市甲田遺跡など須恵器を出土する遺跡がある。

古墳以外の遺跡についてみれば、富田林市佐備、五軒屋にそれぞれ須恵器窯跡が所在する。とくに前者は大字佐備字カマバという地名であり、その地名から容易に窯跡であることが判明し、踏査によって確認したものである。本窯の出土遺物は、蓋杯、高杯、壺、甕などがあり、陶邑編年I型式5段階～II型式1段階前後のものである。また後者は、泉北丘陵に分布する和泉陶邑窯の東端と考えられるもので、前者との直接的関係はみられず、いわゆる石川流域からは大きな丘陵を隔てている。

歴史時代に入ると、寺院、火葬墓とさまざまな様相を呈てくる。火葬墓に富田林市平、板持の各古墳群で古墳に近接して骨蔵器が検出されている。また、竜泉寺西方の硯石では、外容器の大甕内に容れられた骨蔵器が発見されている。また大伴、板持、毛人谷などでも骨蔵器の出土がある。

一方、寺院も河内地方に盛んに造られているが、新堂廃寺は1959、60年の調査によって我国最古様式と考えられる寺院跡の一つであることが判明し注目された。各時代の文様瓦も出土し、大和を中心とする地域のものと共に多くのものもみられた。この寺院跡のおそらく旧境内に接していたものと考えられる西方丘陵には、当該寺院所用のものと考えられる瓦を焼成した瓦窯跡が2基確認されている（オガニジ瓦窯）。そのうち1基は、13度の傾斜をもつ無段式の登窯で、燃焼が一部ロストル式に改造されたあとを残していた。石川中流域の寺院跡としては、石川支流佐備川上流の嶽山中腹の竜泉寺（奈良前期）、石川上流の細井廃寺（奈良前期）、平安時代の端丸瓦を出土した錦織廃寺などがあり、仏教文化も以前の各時代と同様この地域一帯でも盛えていたことを知る。

また時代的に下降した中世にも鎌倉～南北朝を中心とする各種遺跡が多く分布するが、その調査例は、先述竜泉寺旧境内の坊跡群あるいは瓦窯跡群などきわめて少ない。

（中村 浩）

遺跡名	所在地	立地	遺物	種類
栗ヶ池遺物散布地	富田林市桜井町2丁目	台地	サヌカイト	散布地
新堂遺跡	中野町1丁目他	台地	弥生土器 サヌカイト	集落跡
五軒屋遺物散布地	五軒屋	丘陵腹	石槍	散布地
南別井遺跡	南別井他	台地	弥生土器 石鐵、石槍	集落跡
平木遺跡	東板持	丘陵腹	弥生土器	"
梅田遺跡	西板持	台地	弥生土器	"
尾平遺跡	東板持	台地	弥生土器 石鐵、サヌカイト	"
柿ヶ坪遺跡	下佐備	台地	弥生土器 石鐵	"
彼方遺跡	彼方	丘陵端	弥生土器	"
西山遺物散布地	澗谷	丘陵腹	弥生土器	"
インノ谷遺跡	"	丘陵	"	"
中ノ平遺跡	彼方	"	"	"
ジョ山遺跡	"	"	"	"
寺池遺跡	鎧織	台地	弥生土器 石槍	"
錦聖遺跡	"	"	弥生土器 石鐵	"
佐備川流域遺跡	上佐備他	"	石鐵 サヌカイト	"
錦織南遺跡	錦織	"	石鐵	"

table 1 石川中流域の弥生遺跡分布一覧

。本表は、北野耕平、竹谷俊夫氏「富田林市の埋蔵文化財」—埋蔵文化財基本分布図—昭和53年3月富田林市教育委員会編より作成したものである。

。本文中でとりあげた遺跡については省略に従っている。

第3章 遺構

1. 概観

調査は、排土処分場所の確保、調査期間の問題などの各種条件や制約から二分して行ったが、それによって検出された主な遺構は以下の如くである。すなわち住居跡4、掘立柱建物2、土壤2、炉跡1、溝6石列（暗渠）4などである。住居跡を構成するピット群を中心とする遺構は、東部域に集中し、溝などは西部域で多く検出されている。

また宅地予定地への進入路に該当する部分について、東側を南北に通る東高野街道まで、幅約1.5mのトレンチを設定した。しかし、盛土が多いための崩落が著しく、加えて湧水のため十分な調査を実施したとはいえないかった。とはいっても弥生時代に属すると考えられるピットと中世頃とみられる小さな掘方を伴う柱穴を1個検出したことは、今後の周辺地域調査に重要な示唆を与えるものと考えられよう。

さらに南部遺構調査時に西方へ延長22m、幅約2mのトレンチを設定し遺構の確認を画したが、全くその痕跡をもみることが出来ず、むしろ池あるいは川のよどみが存在したことを見たことを確認したこととなった。

以下に層位関係の観察および各遺構についての状況について記述しておきたいと思う。

2. 層位

中野遺跡は石川西岸的丘上に営まれた遺跡であり、現状では水田が大半である。そのため水田開墾に伴う擾乱は調査開始以前から十分予想されていたものであった。

今回調査の対象とした地域には、水田部分を残す部分と盛土を行って宅地化を計った部分の二者があり、必ずしも一様に把握しえるものではなかった。

しかし、調査地域全体を通じて、北部遺構調査に伴う盛土部分を除いて考えるならば、ほぼ同一の傾向であることが判り、大きな層位的な擾乱はみられない。それらを上層から順に記述するならば、表土面、耕土面まで約10~40cmで、床土と呼称する黄褐色粘質土を固めた層が約15~30cmの厚さでみられた。これらの層でみると遺物包含状態は、わずかに細片化した土器片の痕跡程度がみられるにすぎなかった。

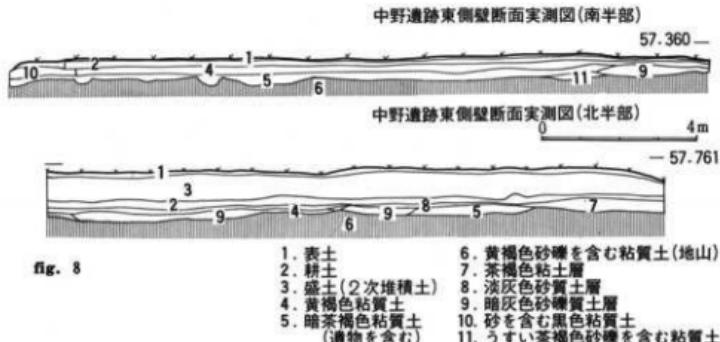
次いで東部域では暗黒褐色粘質土層がその北側でみられ、これとほぼ同一面で南側では暗黒褐色粘質土層があらわれる。それらはいずれも10~30cmの厚さをはかり、弥生式土器、須恵器をはじめとする各遺物を包含する。しかし、これらの層は自然堆積によるものではなく、開墾に伴う整地層的な意味をもつものであると考えられ、遺物包含層にも上下関係で区分は殆んど不可能である。

西部域では、表土・耕土・床土とつく点は全く東部域と同じであるが、床土以下は約15~40cmの厚さをはかる暗青褐色粘質土層で一部に砂礫を含むものがある。この層には全く遺物を伴うことがなく、いわゆる自然堆積層であることがよく看取し得る。この層の下層にいわゆる遺物の包含があり、東部域との層ではうまく対応する。

東西の層位関係をみると先述遺物包含層が、東端で20cm前後であるのに対し、除々に西へ厚味をまして中央部附近にいたる。しかしその包含層も中央部から再びうすくなりはじめ、西端では殆んど認められず、既述の暗青褐色粘質土層となっている。

これらの層の下が東部域では黄褐色砂礫質土層であり、西部域では黄褐色砂質土層である。構造はいずれもこれら地山を切り込んで作られており、その上層の包含層をはじめとする各層への切り合い関係は全くみられない。

また概観の項でも述べた進入路側の延長トレンチは、東部域の層位関係をほぼそのまま継承してのびており、東高野街道附近では、床土以下、堅緻な地山面までに約2mの暗茶色砂礫質土の堆積がみられる。



一方、南部遺構西端から延長したトレンチでは、表土、耕土、床土の変化は全く同じ傾向で、さらに下層に一部ヘドロ状の青灰色粘土の堆積が一部にみられ、そこに水分が存在したことを見ていた。なお遺物の包含層は、西部域の観察結果と同じく、全くみられなかった。

3. 遺構各説

住居跡1（SB 001）

北部遺構の北東部に位置するもので、南北約5m、東西約5mの、ほぼ円形を呈する住居跡と考えられるものである。近接して所在する喜志遺跡での住居跡の如くピット群をとり囲む円形をなす側溝は、後世の開墾によって削平されてしまったものと考えられる。

本例は、今回検出されたものの中で比較的遺存度の不良なものである。なおピットの径は50~60cm、深さ5~20cm前後で、ほぼ直立した状況で、ピットの壁が斜面をなすものは殆んどみられない。

住居跡2（SB 002）

北部遺構の南東部に位置するもので南北5m、東西5mをはかる图形プランを呈する住居跡と考えられる。住居跡1（SB 001）と同様、周溝はすべて削平され、その痕跡は全くとどめていないものである。ピットには二、三、重複しているものがあり、その切り合い関係から、少なくとも何度かの建て換え、あるいは補修が行われたものと考えられる。ピットの径は15~40cm、深さは5~20cm前後をはかり、直立するものが大半である。

住居跡3（SB 003）

南部遺構の北東部で検出されたものである。南北5.5mをはかる円形、あるいは方形プランを呈する竪穴式住居と考えられるが前者と同様、周溝の痕跡をとどめていない。ピットの配置関係からみて、方形プランを呈する可能性が前二者の住居跡よりは濃いものと考えられる。ピットの径は20~40cm、深さは40cm前後をはかる。なおピットは、いずれも直立している。

住居跡4（SB 004）

南部遺構の南東部で検出されたもので、南北約5m、東西約5mをはかる住居跡

と考えられるピット群である。開墾に伴う削平が前二者に比較して最も著るしく、はたして住居跡を構成するかどうか心もとないものもある。ピットの径は15~30cm、深さ20cm前後をはかるものであり、先述の各例と同様な範囲に比較的よくまとまっている。

建物1 (S B 005)

北部遺構の中央部で検出された井戸1 (S E 001) をとりまくような形でピットが巡る1間×3間の掘立柱建物である。桁行300cm、梁行320cmを各々はかる。3間を数える梁の柱間は90~120cm、ピットの径は20~40cm、深さ約15cm前後を各々はかる。束柱は認められず、当該建物が倉庫としての機能を果しえないことを示している。恐らくは通有の掘立柱建物あるいは井戸を覆う覆屋の如き特殊な建物と考えられる。

建物2 (S B 006)

南部遺構の北東部で住居跡3 (S B 003) と重複して検出されたもので、2間×2間の掘立柱建物である桁行360cm、深行420cm、ピットの径30~90cm、深さ20cm前後を各々はかる。いずれも上部を削平されており、当初の状況とは著るしく変化していると考えられるが、束柱はみられない。従って、前者と同様倉庫としての機能は考え難いものである。

井戸1 (S E 001)

北部遺構の中央部分で検出された径100cm、深さ50cmの円形プランを呈する素掘りの井戸である。内部には、こぶし大から人頭大までの河原石が充てており、それらに混って砥石、弥生式土器片、サヌカイト片などが検出された。とくに当該遺構をめぐるように建物1 (S B 005) があり、覆屋を伴う井戸と考えられ興味あるものである。また出土遺物に後世のものが含まれていないことから弥生時代中期のものとして大過ないだろう。

井戸2 (S E 002)

南部遺構の中央部附近から検出されたもので、当初土壌と考えていたものである。直径210cmの円形プランを呈する素掘りの井戸であり、深さ40cm前後から径が120cmと狭くなり、ほぼ垂直に下る外壁を構成する。その深さは約150cm前後であり、

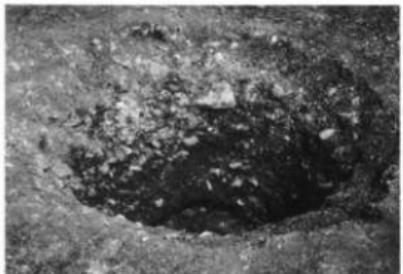


fig. 9 井戸 2 (S E 002) 全景

140 cm前後から湧水のため調査を断念せざるを得なかった。井戸内からは、唐古Ⅲ～V様式の壺、甕などの土器とともに石包丁あるいは、石槍、サヌカイト片など多数出土している。恐らくは弥生中期以後用いられたもので少なくとも以後の段階には埋め戻されたものと考えられる井戸である。

いすれにしても、周辺地域の湧水点の高さとともに比較的良好な湧水を得られた井戸である。

炉跡 (S X 001)

北部遺構の西南部で検出された炉跡である。一辺65cmの方形を呈し、内部には炭灰、その外方に黄褐色に環元焼固した部分（約1 cm）その外方に黒褐色の焼土、さらにその外方を赤色酸化層（幅3 cm）がめぐっている。内部の炭灰堆積の厚さは比較的厚く約5 cmをはかった。しかしこの炉跡は最も底に近い部分であり、通常の場合、周辺にみられる炉跡に伴うピットなどに全く検出されなかった。恐らくは一時的な焚火の如きものと考えるのがよいのかもしれない。溝5 (S D 001) が廃棄された後に営まれたもので、その溝中遺物との関係から時代が推定される。すなわち時代は溝よりも後世であることから中世段階以後と考えられる。

土壙 1 (S K 001)

北部遺構中央南よりで、検出されたN—45°—Wを主軸とする隋円形の土壙である。長径110cm、短径65cmをはかる。底面は、なだらかな傾斜をもつもので、その深さは13～15cm前後である。内部には須恵器甕の体部片および土師器鍋の片、さらに木質が30×17cmの範囲でみられた。恐らくは、その状況から土壙墓と考えられる。時代は古墳時代後期（6 C頃）と思料される。

土壙 2 (S K 002)

北部遺構の中央部南よりで検出された南北100cm、東西120～130cmをはかる方形に近い土壙である。上部浅く削平されており、その用途性格について明らかにする

ことが困難である。内部には弥生式土器片とサヌカイト片が遺存しており、時期は弥生中期である。いわゆる土器だまりに近い様相を有しているが、性格等については不明である。

土壤3 (SK 003)

南部遺構中央部南側で検出された長径150cm、短径90cmをはかるもので、ほぼ東西を主軸とする不整形なプランを示す土壤である。他のものと同じく上部を削平されているため遺存度は不良である。内部から須恵器の壺の破片が大量に検出されており、それらが少なくとも2個体分のものであったことが判る。すなわちこの遺存分で判断するのは問題があるが、これらが甕棺としての機能を果していた可能性をもつものであろう。なお口頭部が検出されていないため詳しい判断はできないが、陶邑編年II型式に属することは明らかである。

溝5 (SD 005)

南部遺構の西部域を南から北へゆるやかに蛇行しながら流れる底の平らなU字溝である。幅60cm、深さは南端で27cm前後、北端で12cm前後となる。また内部附近の深さは20cm前後で、その全体の傾向も、きわめてゆるやかなものである。北部遺構で検出された溝とつながるものであり、内部には黒褐色粘質土（有機質土）が充満しており、遺物も弥生式土器および須恵器（高杯一陶邑編年II型式6段階、他）、瓦器などが出土しており、下限を平安時代後半頃にまで下げられるものである。自然流水路としての可能性もあるが、用水路とする用途も十分考えられるものであり、人為的に設定された可能性もある。

溝6 (SD 006)

南部遺構の西端を先述の溝5 (SD 005) と平行しながら南北にのびる溝で、蛇行度合は、前者よりは少ない。その幅は約180cmであるが北端で90cmと北へ行くほど狭くなっている。深さは南端が30cm、北端が60cmで、南から北へ流れていたものと考えられるが、その遺構の状況に、むしろ逆な感を与える。内部を埋めていた土は先の溝5 (SD 005) と同じで、遺物もほぼ同じである。その用途については不明であるが、前者よりも自然流水路としての可能性が少ないものである。

溝7（SD 007）

南部遺構の西方部分で検出された溝である。これらの溝は上部にすべて削平されているためその状況は判断しえないが、西へのびたのち大きく鍵形にカーブすることから先述の溝とは性格の異なるものであることが明らかである。とくにその西部を溝6（SD 006）南を溝5（SD 005）によって切られており、当該溝の年代推定の好資料を提供した。溝の幅は西で約80cm、東端で100cm、最大幅は約2mを各々



fig. 10 石包丁出土状況

はかる。なお深さは遺存度の不良さを反映してわずか5cm前後をはかってすぎない。なお、その形状から判断する限り方形周溝墓の周溝部分とするのが最も妥当なものであり、当該地域にピットなどが全く分布しないことも、その推測を助けるものである。遺物は石包丁および弥生式土器の破片が出土している。

溝8（SD 008）

その西端を溝6（SD 006）、東を溝5（SD 005）で切られた幅約2m、深さ5cm前後のきわめて残りの悪い溝である。あまり短かいため、その性格を推定することが出来ないが、先の溝7（SD 007）とは直接的関係がみられない。遺物に磨製石剣がある。



fig. 11 石剣出土状況

溝9（SD 009）

先述の溝8（SD 008）の延長上にある幅が60cm前後をはかる溝で、西から東へとのびるものである。溝5（SD 005）によって切られているが、溝8（SD 008）

との直接的関係はないように見られる。遺物には弥生式土器の細片がみられた。

溝10（SD 010）

北部遺溝の中央部附近にみられる幅20cm、長さ4.3mをはかる溝である。溝中からは弥生式土器片が検出されている。その周辺には若干のビットがあり、最も位置的に高いことから住居跡に伴う周溝の可能性もある。

石列暗渠、溝1～4（SD 001～4）

南部遺構のはば全体を通じてみられた溝状遺構である。とくに東西にのびる溝1（SD 001）と、その西端ではほぼ直角に南へ屈曲してのびる溝2（SD 002）、さらにその南へのびる途上と、その南端で西へ屈曲する溝3（SD 003）と溝4（SD 004）がある。それらの残存長は、溝1（SD 001）が23.5m、溝2（SD 002）が11.6m、溝3（SD 003）が1.7m、溝4（SD 004）が3.6m前後をはかり、その幅は30～40cm前後、深さ10cm前後をそれぞれはかる。石列を伴う溝は10cm前後の扁平な河原石を側壁に、さらにその上に蓋石として同程度の大きさの石をおいたものである。とりわけ溝1（SD 001）では、丁寧に、ととのえてつくられており、とくにこの構築に要した労力の大きさが感じられる。この溝の上に所謂床土をおき、さらに耕土へとつづくものである。従って、このように丁寧につくられた溝も目に触れることなく暗渠としての用に供されることとなる。

これは、中野遺跡周辺の湧水面の高さと関係があり、そのため常に排水が可能な暗渠の必要に迫られていたのである。附近の農家の人々はこれを「水道（みずみち）」と呼称し、現在でもこれ程、丁寧な造作ではないが近い方法で暗渠をめぐらすという。出土遺物は、摩耗した土師質土器、弥生式土器細片、サヌカイト片とともに近世に属すると考えられるカーボンのよく残った丸瓦片、あるいは陶磁器細片が溝中あるいは周辺から採集された。いずれにしても、出土遺物から判断する限り近世に属するものであり、あまり時代的に遡ることがない遺構ではあるが、そこにみられる努



fig. 12 溝1（SD 001）調査風景

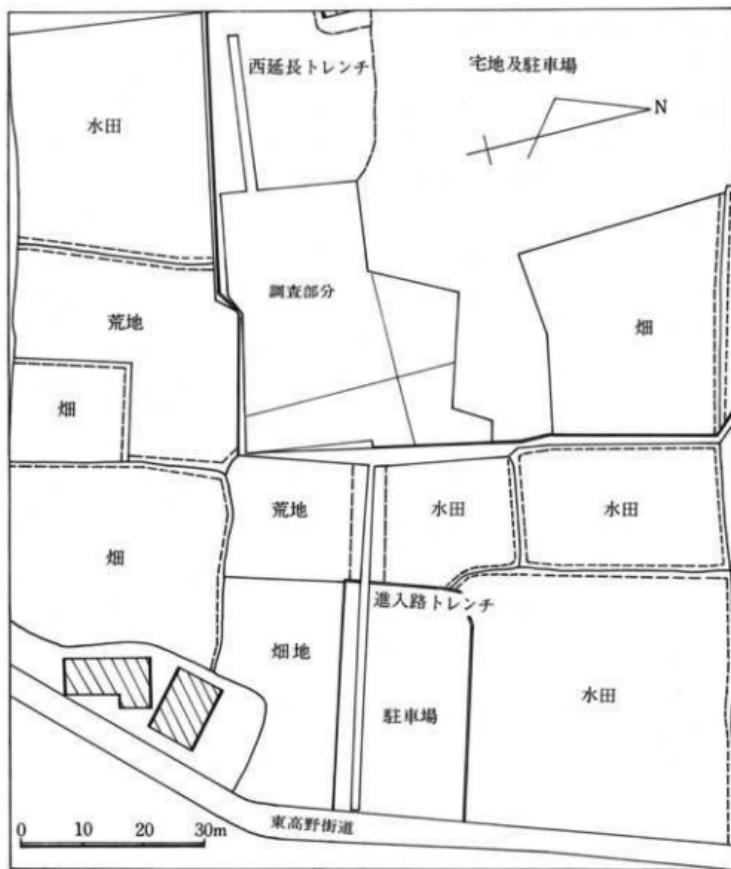


fig. 13 今回調査部分と周辺の現状測量図

力の跡は興味深いものである。

4. 小 結

中野遺跡で検出された各遺構について検討を加えてきたが、それらを時代順にまとめるに以下の如くとなる。

まず弥生時代中期にあっては、住居跡1～4（S B 001～4）、掘立柱建物1～2（S B 005～6）、土壙2（S K 002）、井戸1,2（S E 001,2）、方形周溝墓（SD 007）が所在し、さらに溝8,9（S D 008,9）も存在した可能性がある。とくにこの段階が当該中野遺跡の最も盛えた頃であり、農耕文化の展開とあいまって石川の河岸段丘上で集落が盛んに営まれた時期でもある。遺跡は、その西端近くを調査したこととなり、集落跡なかでも住居部分と墓域が明瞭に区分される。いわば境界部分ともいえるところである。

さらに弥生後期に入ると同一地域での遺構が確認されていないためその状況を看取することは出来ない。しかし、遺物の存在は、明らかにそこに何らかの生活の場所が存在した筈であり、今後の調査にゆだねざるをえない。

古墳時代に入ると西側に所在する丘陵では真名井古墳、鍋塚古墳などの築造があるが、それに時期的に平行する遺構、遺物は当該調査にかかる中野遺跡では検出されなかった。

後期に入ってやや時代的経過を伴った6世紀代後半から再び中野遺跡に人々の生活がみられるようになった。これは、土壙墓（S K 002,3）の存在や溝5,6（S D 005,6）あるいは、井戸2（S E 002）などから須恵器が検出されることによって証する。しかし、彼らの生活の主たる場所である住居跡などについては、検出することが出来なかった。いずれにしても当該時代の遺物が東部分の側溝工事中に多く採集されており、将来の調査によって明らかにされるところに多くの期待をかけなければならないだろう。

この後、平安～鎌倉時代のいわゆる中世について、遺物の採集があるもののいずれも摩耗が著しく、それらが流入品であることを示している。従って、この調査部分が生活の中心となっていた可能性は殆んどないものと考えられる。



fig. 14 中野遺跡中心部（D-2区）
—調査地から北東を望む—

やがて近世に入ると再び水田、耕地の開墾に伴う動きが活発化し、それに伴う遺構やその時代の遺物が採集されるようになる。溝1～4（SD 001～4）はその代表的なものであり、それ以後、この地域がいわば農業生産地帯と化し、集落としての機能は近時まで再びよみがえることがなかったのである。

（積山 洋・中村 浩）

第4章 遺物

1. 概観

石器、弥生式土器、土師器、須恵器、屋瓦、土師質土器など出土遺物には、多種多様なものがみられる。それらのうち細片化してはいるが弥生式土器が最も多く採集され、サヌカイト(石器を含む)、須恵器とつづいている。既に述べた如く、本遺跡が上部を耕作によって大半削平されていた状況と良く呼応するかのようであり、中野遺跡全体の傾向として把握するには問題があろう。

ともあれ、今回調査で採集した遺物について、各遺構毎の採集点数を示したもののが表である。このうち石器、サヌカイトとしてあるのは、前者が定形、不定形のも

	出土地点	石器	サヌカイト	弥生式土器	土師器	須恵器	その他
北 部 遺 構	表採	0	1	94	0	30	0
	住居1(SB001)	1	35	76	0	0	4
	住居2(SE002)	0	18	84	0	2	0
	井戸1(SE001)	2	50	87	0	0	1
	土壤1(SK001)	0	0	0	9	1	1
	土壤2(SE002)	5	52	226	0	0	0
	溝1(SD001)	0	33	33	0	46	10
	進入路トレンチ	0	10	38	0	0	0
南 部 遺 構	東部流水路表採	0	4	5	2	39	0
	表採	4	61	592	92	82	2
	住居3(SB003)	0	10	69	16	8	1
	住居4(SB004)	0	111	320	49	3	0
	井戸2(SE002)	5	85	1739	45	4	2
	土壤3(SK003)	0	8	130	33	125	0
	土壤4(SK004)	0	7	79	0	7	0
	溝2(SD002)	0	1	0	0	0	1
北 部 遺 構	溝3(SD003)	0	0	0	0	0	1
	溝4(SD004)	0	0	4	0	0	1
	溝6(SD006)	1	22	197	20	13	0
	溝7(SD007)	1	23	427	16	24	0
	溝8(SD008)	0	19	367	4	4	0
	溝9(SD009)	0	84	168	18	45	0
	溝5(SD005)	0	52	330	2	67	0
	建物2(SB005)	0	12	254	27	13	0
合計		19	758	5319	333	513	24

table 2 各遺構出土遺物一覧

※ 単位はすべて片であり、1個体が数十片に分散している場合がある。

の、さらに石包丁などを含めており、後者には、素材面を残すものあるいは石核、剝片などを含めている。また各遺構毎の数値については、周辺のものを含んでおり、他からの流入物の可能性をも十分に有するものである。また重複する遺構部分からのものについては、最も近いものに集計している。

さて各遺物の詳しい観察および検討については、後にゆずることとし、各時代を通じてみられる傾向について述べておきたいと思う。

弥生時代に属する石器、サヌカイト、弥生式土器の出土が最も多いことは既に記したが、とりわけ石器については、石包丁を除いて、大半が製品として完成する以前の、未製品であることが注目される。改めて報告する中野遺跡D4区での多数の各工程に属するサヌカイト片とも充分呼応するものであり、当該遺跡の性格の一端を知る重要な資料である。弥生式土器は、中期が大半で、一部後期のものが含まれている。それらは、摩耗が著しく、殆んど文様をも確認出来ない状態であり、先述中野D4区出土遺物の状態とは著しい差異を認める。しかし、それらの差については、遺物の埋蔵条件の差によるもので、遺物そのものの問題ではないことは明らかである。各遺構が耕作時に削平されていた事実から考えると、この遺存度合は良好としなければならないだろう。

古墳時代については、土師器、埴輪、須恵器が採集されている。土師器は、土壙1(SK 001)での堀が最も良好な遺存状況を呈するもので、他はいずれも細片化している。埴輪は、わずか2点の出土であるが、直接結びつく遺構がみられないことから、近接地での関連遺構検出の可能性が考えられ注目されるだろう。須恵器は、蓋杯を中心とする器種ではあるが、通常住居跡などで検出されるものに加えて、当時の古墳主体部内からの可能性が濃いものがあり、埴輪とともに関連遺構の追及が望まれるものである。なお須恵器については、その多くがⅡ型式後半段階のものであり、各遺物の時期差は、きわめて少ないといえる。

歴史時代については、土師質土器、屋瓦が採集されている。しかし、石列内での土師質土器を除いては、いずれも耕土。あるいは遺構上面の包含層中での検出遺物である。これら遺物は、先述、古墳期に直接連続するものではなく、平安～室町時代の比較的幅を有する時代の各々所産であり、それに伴う遺構は、溝2(SD 002)、

3 (SD 003), 4 (SD 004) であり、これらは水田耕作のために設定された暗渠用の溝である。従って、この溝の年代が、当該地域の水田開墾の時期に平行するものと考えることは充分可能である。これは、さらに周辺地域の畔線との方位関係から推定すると、より重要な問題を提供するものと考えられる。

以下、各遺物について検討を加えることとする。

2. 遺物各説

石器

この項には、定形のものその他、不定形あるいは不明石器さらには、石核、剝片をも含めている。なお石核、剝片については、個々の特色について紹介することは紙幅の関係もあり、最も出土量が多く、まとまっている井戸2 (SE 002) および井戸1 (SE 001) 出土の両者について各々の法量(長径、短径、厚さ、重量)のみを後に掲示しておきたいと思う。なおここでいう不定形石器には未製品の一部を含んでおり、定形石器の分類範疇に含まないものを示している。

A 石鎌 (PL 13, 28)

(1)は、長さ 3.8cm、幅 1.9cm、厚さ 0.5cm をはかる凸基有茎式に分類されるものである。逆刺は角をなし、茎の抉りは明瞭である。全体に調整剝離が施され、大剝離面をとどめない。全体に摩耗部分が少ない。

<住居跡4 (SB 004) 周辺出土>

(2)は、長さ 4.0cm、幅 1.6cm、厚さ 0.6cm をはかる石鎌の未製品と考えられるものである。両面とも大剝離面をとどめ、細かい調整剝離はほとんど施されていない。

<南部遺構表採>

(3)は、長さ 3.9cm、幅 1.8cm、厚さ 0.6cm のものである。前者と同じく未製品で、大剝離面を両面にとどめる。調整剝離は片面の一部のみ施されている。

<建物2 (SB 005) 周辺出土>

(4)は、基部および茎しか残存しないので長さは不明であるが、幅 2.2cm、厚さ 0.4 cm をはかる。全体に調整はあらく、また、茎の抉りは不揃いである。(1)と同様の形態かと思われる。

<表採>

(5)は、長さ3.7cm、幅2.2cmをはかる未製品である。大刺離面を大きくとどめており、調整刺離は一部にしか施されていない。

＜住居跡3（SB 003）出土＞

(7)は、幅2.8cm、厚さ0.5cmである。茎を欠損しており、正確な長さは不明であるが、現存部長さは5.8cmと、やや大型である。逆刺はまるみをもつ。全体に刺離調整を施してあり、大刺離面はとどめていない。

両側面は鋸歯状を呈する。

＜表採＞

(11)は、長さ4.7cm、幅2.5cmをはかる未製品である。片側側面に調整刺離を施してはいるが、全体に大刺離面をとどめている。

（土壤3、SK 003出土）

B 石槍（PL 13, 29）＜井戸2（SE 002）出土＞

(6)は、先端が遺存する唯一のものである。幅2.7cm、厚さ1.1cmであり、石槍としてはごく一般的な形態であると思われる。全体に少しあらい刺離が施されているが、先端近くは細かく刺離を施している。

＜溝5（SD 005）出土＞

(8)は、長さ4.1cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmと、石槍の中央部としては少し小さく、石鎌もしくは石錐の未製品の可能性も考えられ、石槍の一部としては疑問が少なからず残る。全体に大刺離面がとどまっており、調整刺離はほとんど施されていない。

＜井戸2（SE 002）出土＞

(9)は、長さ9.5cm、幅2.9cm、厚さ1.0cmをはかるもので、その形から考えると、中央よりも先端近くに位置するものであろう。刺離はあらく行なった後に両端を調整したものとのようである。大刺離面はとどまっている。

＜溝5（SD 005）出土＞

(10)は、長径8.7cm、短径3.3cm、厚さ1.4cmをはかる。石槍の未製品かと思えるもので幅3.6cmで、両面とも、大刺離は残していないものの、刺離調整はあらく、石槍としての形は、まだ出来ていない状態である。

＜土壤4（SK 004）出土＞

C 石錐

長径 4.8 cm, 幅 1.6 cm, 厚さ 0.6 cm をはかる石錐の可能性の濃いものである。大剝離面をとどめており、調整はあらい。しかし錐部は、比較的形が整っている。池上遺跡における D タイプに類似した形である。使用痕はない。また石鎌未製品である可能性もある。石錐は一点のみ出土。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

D 石包丁 (PL 12, 27)

(5)は、残存長径 6.7 cm, 幅 3.5 cm, 厚さ 0.8 cm をはかる石包丁の破片である。刃部が磨耗し、大きく、彎曲している。これは、向度も砥ぎ直して使用したためと推察される。2 個の穿孔がみられ、そのうちの 1 個には、紐擦れ痕が認められる。 $\frac{1}{2}$ ほど欠損している。石材は緑泥片岩。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

(6)は、残存長径 8.5 cm, 幅 4.2 cm, 厚さ 0.65 cm をはかる長方形を呈する石包丁の破片で、片刃である。背部は彎曲気味だが、刃部は直線に近い。3 個の穿孔があり紐擦れ痕は見られない。他の 2 点に比較して、磨耗は少ないが、刃部には使用痕が認められる。 $\frac{1}{3}$ 度欠損している。石材は緑泥片岩である。

＜溝 7 (SD 007) 出土＞

(7)は、残存長径 10.0 cm, 幅 3.5 cm, 厚さ 0.4 cm をはかる石包丁の破片である。(5)と同様に、刃部は磨耗、彎曲しており、これも砥ぎ直しの結果ではないかと考えられる。刃部に使用痕が残る。2 個の穿孔がみられ、紐擦れ痕が認められる。なおこの破片の旧形は三日月形をしていたと考えられる。 $\frac{1}{4}$ 度欠損しているが、出土例では、最も良好な遺在状態を示すものである。

＜南部遺構表採＞

(4)は、 2.6×2.0 cm の小さな破片である。遺存する刃部の角度やその与える感じから推察すると石包丁の刃部かと思える。

＜住居跡 1 (SB 001) 出土＞

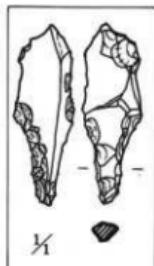


fig. 15

番号	種類	石 材
5	石包丁	緑泥片岩（三波川変成岩）
7	"	" ("")
6	"	泥質片岩 ("")
—	石劍	緑泥片岩 ("")

table 3 石劍、石包丁の材質について (京大理学部・巽 好幸、鳥居雅之)

※ 三波川変成岩は、近畿地方では吉野川、紀の川沿いに分布する。

E 石劍 (PL 12, 27)

長径 11.0 cm, 幅 3.0 cm, 厚さ 0.7 cm をはかる石劍である。片側には刃がついているものの、反対側面には、一部に刃の痕がわずかにみられるとはいへ大半が打ち欠いている。またその刃部にも使用痕がわずかに残ることから、石包丁を転用した可能性が考えられる。その形態から考えて、磨製石劍というよりは、磨製石槍というのが当を得ているかもしれない製品である。石材は緑泥片岩である。

F 不定形石器 (PL 13, 14, 29, 30)

不定形石器は、総数15点出土しており、うち6点が井戸1 (SE 001), 井戸2 (SE 002) からのものである。以下、不定形石器について記述を進めていきたい。

⑬は、長径 4.5 cm, 短径 3.0 cm, 厚さ 0.8 cm をはかる。一部に素材面を残している他は、ほとんどが大剝離面であり、打撃痕も残している。一部、刃をつけた様な部分があるが、それが意図してつけられたものかどうかは不明である。

⑭は、長径 5.5 cm, 短径 3.8 cm, 厚さ 1.3 cm をはかる。他の石器 (打製) に比較して白っぽい色であるのが熱による変化を生じたためであろう。片面は大剝離のみであるが、もう片側は、あらくはあるが調整剝離が施されている。

<南部遺構表採>

⑮は、長径 7.5 cm, 短径 3.8 cm, 厚さ 1.3 cm をはかる。素材面、および大剝離面をとどめており、打撃痕も残っている。剝離調整は、かなりの部分まで施されており、石鎧未製品の可能性もある。

<井戸2 (SE 002) 出土>

(5)は、長径 7.5 cm、短径 3.5 cm、厚さ 1.8 cm をはかる。大剝離面を多くとどめ、調整剝離は、ほとんど施されていない。打撃痕が残っている。

<井戸 2 (SE 002) 出土>

(6)は、長径 5.9 cm、短径 3.5 cm、厚さ 1.7 cm をはかる。素材面、大剝離面、打撃痕をよくとどめている。不定形石器として分類する方がよいのかどうか問題がある。

(1)は、長径 6.0 cm、短径 4.2 cm、厚さ 0.8 cm をはかる。素材面はほとんど残していないが、大剝離面は多くとどめている。一部に剝離調整を施しており、石器としての機能を十分に發揮しているものである。なお、一部に打撃痕が残っている。

<北部遺構表探>

(3)は、長径 9.2 cm、短径 5.7 cm、厚さ 2.5 cm、重さは 147.9 g と大型である。素材面、大剝離面を残すもので、作為的な剝離は認められない。打撃痕を残している。

<北部遺構表探>

(7)は、長径 9.3 cm、短径 4.5 cm、厚さ 1.4 cm をはかる素材面を残すものである。あらくはあるが、かなり意図的に施したと思われる剝離がある。手のひらにすっぽり入るくらいの大きさで、石包丁の代用品であった可能性もある。

<北部遺構表探>

(8)は、長径 11.0 cm、短径 6.0 cm、厚さ 1.7 cm をはかる。きわめて大型のもので、全面にあらい剝離が施されている。用途は不明だが、石器として使用されるものと考えて大過ないだろう。一部には細かい剝離も施されている。

<南部遺構表探>

(8)は、長径 7.2 cm、短径 4.9 cm、厚さ 1.1 cm をはかる。片側侧面に刃が付けられている。大剝離面をとどめ、素材面も一部残っている。これも、石包丁の代用として供された可能性がある。

<土壤 2 (SK 002) 出土>

(9)は、長径 6.0 cm、短径 4.3 cm、厚さ 1.0 cm をはかる。(8)に似通った形をしており、底辺に相当する部分にのみ、調整剝離が施されている。これも前者と同様に石包丁の代用としての用途が考えられる。なお刃部に使用痕は見られない。

<土壤 2 (SK 002) 出土>

以上が図示したものであるが、他に4点。不定形石器としてあげられるものがあるので併せて記述しておきたいと思う。

その1つは、長径5.3cm、短径3.3cm、厚さ1.3cmをはかるものである。素材面、大剝離面を残しており、一部に調整を施した様な部分がある。しかし、意図的かどうかわからぬために、石器とは断定しがたいものもある。

<井戸2 (SE 002) 出土>

⑭も、長径4.5cm、短径3.9cm、厚さ0.9cmをはかる。一部に素材面を残している。剝離調整の行なわれた如き部分が認められるものの、それはあらく、意図的になされたものかどうかは疑わしい。従って石器としてよいかどうか問題がある。

⑮は、長径10.9cm、短径4.4cm、厚さ2.4cmをはかる。素材面を多く残しており、あらく剝離調整されたように見え何らかの石器の未製品である可能性もあるが一方、極めて石核に近く問題がないわけではない。

G 石核、剝片 (PL 14, 31)

各石器については既に述べた如くである。以下、石核、剥片について一括して出土した井戸1 (SE 001)、井戸2 (SE 002)のものについて計測値を表として後に掲げておくこととする。なお一部既述石器と重複するものもある。

弥生式土器

今回の調査で出土した遺物のうち、最も量的に多いのが、弥生式土器である。しかし既に概観でも述べたように、量の多さとは、反対に遺存度が不良であり、復元し、かつ図化しえるものは、あまり多くを数えることは出来なかった。

器種としては、甕、壺、台付鉢型土器、鉢形土器などがあり、時代は中期(Ⅲ、Ⅳ様式)が大半で、一部後期(Ⅴ様式)と考えられるものが検出されている。また弥生式土器を破粹して転用したとみられる円板状土製品が2点出土している。

このうち1個は、中央に円孔を穿っており、その用途が紡錘車であることが判る。一方は他の遺跡でも出土する通例の円板状土製品であるが用途は不明である。以下各器種について觀察と検討を加えたいと思う。

A 鉢類 (PL 15, 32)

(1)台付鉢形土器の脚部の基部と考えられるものの破片である。基部の径5.6cm,

番号	長 径 (cm)	短 径 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	出土地	備 考	番号	長 径 (cm)	短 径 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	出土地	備 考
1	7.2	5.1	1.6	45.3	SE002	剥 片	47	3.4	1.4	0.4	1.9	SE002	端により変化を 受けている
2	5.9	3.5	0.9	15.7	"	"	48	4.3	3.1	0.5	7.5	"	"
3	5.3	3.3	1.3	16.7	"	不定形石器	49	5.6	2.5	1.4	18.8	"	"
4	5.8	2.7	1.3	17.6	"	剝 片	50	3.1	1.8	0.5	2.7	"	"
5	5.7	3.0	0.6	12.9	"	"	51	3.3	2.4	1.0	7.2	"	"
6	3.5	2.7	0.7	6.0	"	"	52	4.3	2.2	1.5	10.6	"	"
7	4.3	3.6	0.7	7.3	"	"	53	6.1	3.9	1.0	16.7	"	"
8	4.7	1.6	0.8	4.5	"	石 錐	54	5.8	3.2	0.9	13.5	"	"
9	3.4	1.3	0.5	3.0	"	剝 片	55	5.1	3.7	1.4	28.0	"	"
10	3.2	1.8	0.6	2.7	"	"	56	4.9	3.2	1.1	15.5	"	"
11	3.9	2.3	0.8	6.1	"	"	57	3.4	2.8	0.5	3.8	"	"
12	3.4	2.7	1.0	7.3	"	"	58	5.6	3.6	1.6	35.8	"	"
13	4.7	3.3	1.1	15.5	"	"	59	3.3	2.3	0.6	3.6	"	"
14	4.5	3.9	0.9	15.1	"	不定形石器	60	3.6	2.4	1.2	7.9	"	"
15	2.6	1.4	1.0	3.2	"	剝 片	61	4.7	2.4	1.2	15.2	"	"
16	2.1	2.1	0.4	1.7	"	"	62	4.3	2.8	0.8	10.2	"	"
17	3.1	1.6	0.7	3.4	"	"	63	2.9	2.2	0.6	4.5	"	"
18	1.2	3.2	1.1	13.3	"	"	64	2.7	1.2	0.8	2.1	"	"
19	4.7	3.2	0.5	4.3	"	"	65	10.9	4.4	2.4	108.2	SE001	不透光器石核
20	3.1	2.7	0.7	4.6	"	"	66	10.4	4.2	1.9	81.8	"	石 核
21	6.1	4.0	1.4	36.9	"	"	67	4.1	3.3	0.9	14.2	"	剝 片
22	4.3	2.8	0.7	7.1	"	"	68	4.6	4.2	1.4	26.0	"	"
23	5.5	2.7	1.4	18.1	"	"	69	5.7	4.8	1.9	50.3	"	"
24	6.1	5.1	1.1	45.1	"	"	70	5.8	2.7	0.7	8.7	"	"
25	3.8	2.7	0.4	4.1	"	"	71	5.8	2.0	0.9	9.7	"	"
26	4.0	3.3	1.1	19.0	"	"	72	2.9	2.0	0.6	3.0	"	"
27	5.4	2.5	0.7	6.8	"	"	73	7.1	5.1	2.5	77.2	"	石 核
28	3.1	1.1	0.6	1.8	"	"	74	3.9	1.8	0.5	3.0	"	剝 片
29	2.8	1.9	0.9	5.8	"	"	75	6.2	2.6	1.1	14.3	"	"
30	3.2	2.6	0.7	2.4	"	"	76	4.3	2.0	1.1	10.6	"	"
31	7.1	4.9	2.1	59.0	"	"	77	5.7	3.9	1.2	27.4	"	"
32	4.7	4.9	1.5	50.6	"	"	78	3.5	1.5	0.7	2.8	"	"
33	4.1	4.1	1.6	32.0	"	不定形石器	79	6.0	4.7	0.6	21.7	"	"
34	4.1	3.1	0.7	10.4	"	剝 片	80	5.6	5.8	1.5	46.2	"	"
35	3.6	1.2	0.4	3.7	"	"	81	6.2	6.9	2.8	128.8	"	石 核
36	2.6	1.7	0.4	2.0	"	"	82	7.7	4.5	2.0	97.8	"	"
37	2.6	1.7	0.9	2.9	"	"	83	6.7	5.2	1.0	33.6	"	剝 片
38	2.0	1.8	0.8	2.6	"	"	84	5.2	3.1	1.9	26.6	"	"
39	2.1	1.1	0.6	1.9	"	"	85	4.8	2.3	0.6	5.1	"	"
40	5.3	3.6	1.1	16.2	"	"	86	2.9	1.8	1.0	5.5	"	"
41	7.1	3.9	1.9	38.2	"	"	87	8.4	5.2	2.4	104.6	"	石 核
42	5.3	4.4	2.0	36.5	"	"	88	3.6	3.0	0.7	6.4	"	剝 片
43	8.6	3.6	2.1	54.8	"	"	89	3.4	2.9	0.5	4.4	"	"
44	5.7	4.2	2.1	70.8	"	端により変化を 受けている	90	5.2	3.7	1.0	15.2	"	"
45	4.9	3.8	0.9	17.4	"	"	91	2.3	2.0	0.5	2.3	"	"
46	5.5	4.2	1.7	28.3	"	"	92	2.1	1.6	0.3	0.9	"	"

table 4 石核, 剥片 (SE 002, SE 001 出土地のみ) の計測値

*本表は青木昭和が作成した。

残存高 3.6 cm をはかる基部から脚は、端部にかけてハの字形に開き、また台部の底は丸いことが判る。

脚部外面に径 0.5 cm の小さな円孔を四方に穿っている。

＜表 採＞

(2) 台付鉢形土器の脚部の基部と考えられるものの破片である。基部の径 5.1 cm、残存高 4.8 cm をはかり、前者と同じく基部からハの字形に開く。外面には千鳥状に径 0.6 cm の小さな円孔が穿たれている。また円孔を穿った痕が内面にまで及んでいる。器壁は 0.3 cm ときわめてうすいものである。

＜表 採＞

(3) 台付鉢形土器の脚部端と考えられる破片である。底部復元 径 14.0 cm、残存高 1.3 cm をはかる。外縁気味にのびてきた脚は、その端部で上外方へ屈曲させている。外面から内面に穿たれた小孔は、径 0.2 cm をはかる。

＜溝 6 (SD 006) 周辺出土＞

(4) 台付鉢型土器の脚部と考えられるものの破片である。基部径 5.4 cm、残存高 4.6 cm をはかる。脚部は前二者と異なりほぼ垂直に下方へ下るもので底部は丸い。外面には径 0.3 cm 前後の細かな円孔が穿たれている。かなり焼成が甘く軟質で表面の摩耗が著しい。

＜溝 6 (SD 006) 周辺出土＞

(5) 台付鉢型土器の脚部と考えられるものの破片である。復元底径 13.1 cm、残存高 2.8 cm をはかる。前述(3)に近似したものであるが端部の外反度合は東側の方がゆるやかである。外方に径 0.3 cm をはかる細かな円孔を穿って相対称としている。

＜表 採＞

(II) 鉢形土器の口頸部および体部の一部であると考えられる。復元口径 21.2 cm、残存高 4.6 cm をはかる。口頸部は、端部で外方に大きく屈曲させている。体部はゆるやかなカーブを描きながら下方へ下る。口頸部外面には櫛描文、さらに列点文状の小孔がやや散在的に所在する。体部外面は櫛描籠状文を施し、内面はヨコ方向の丁寧なナデ調整を施している。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

⑩鉢形土器の口頸部および体部の一部と考えられるものである。復元口径23.0cm、残存高4.1cmをはかる。口縁端部で大きく外方へ屈曲、さらに端部をかなり肥厚させ断面は長方形を呈している。口頸部および体部外面には櫛描簾状文が施されている。内面の調整は不明。

＜表 採＞

⑪鉢形土器の口頸、体部破片である。復元口径32.8、残存高7.4cmを各々はかる。口頸部はゆるやかに内彎し、頸部は内傾する平面をなす。口頸部外面は肥厚しており、段をなし、体部には縦方向の凸線を4本配し、その内には、簾状文を2段に、さらに刺突文を施している。遺存部分は、ようやく底部へとつづく破片であり、焼成は良好堅緻、胎土は密で、黒色砂粒などの含有が多い。

＜井戸1（SE 001）出土＞

⑫鉢形土器の口頸、体部の破片である。復元口径43.1cm、残存高9.5cm、器壁の厚さ1.1cmを各々はかる。口頸部はゆるやかに外反し、端部は凹面をなし、内外面に稜を伴う。外面には、刺突文、波状文（簾状文）2本、刺突文、斜め方向のヘラ描文を各々配する。焼成は甘く軟質である。

＜井戸2（SE 002）出土＞

⑬鉢形土器の口頸部を含む破片である。復元径48.5cm、残存高8.2cmをはかる。口頸部は、やや外反するもので端部は段をなし、内外面に稜を認める。外面は凸線に界された波状文からなる文様帶がみられる。焼成良好堅緻、胎土は密である。

＜井戸2（SE 002）出土＞

B 潢および壺形土器（PL 15, 16, 17, 32, 33）

(6)口径10cm、高17.5cm、底径5.0cm、体部最大径13.6cmをはかる小形の壺形土器である。口頸部は端部で内方へ屈曲させ、肥厚で内傾する平面をなし、外面に稜を認める。体部はゆるやかに外反し、その最大径を下半 $\frac{1}{2}$ 前後に求めるもので、底部は比較的細かく安定性を欠く、体部にマキアゲ痕が残り、上面は横方向のナデ、下方は縦方向のヘラ削り（磨き）、さらに内面には縦方向のナデ調整が施されている。内外面ともに装飾文様はみられず無文である。焼成良好堅緻、胎土密、白色砂粒を含む。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

(7)復元口径 13.6 cm, 残存高 5.2 cm をはかる。口頸部は比較的太く外方へ大きく屈曲させており、端部は段をなす。体部はゆるやかに外反しているが、下半部を欠損しているため全体の形は不明である。焼成やや甘く粗質、胎土密。

＜溝 6 (SD 006) 出土＞

(8)復元口径 12.8 cm, 残存高 5.8 cm をはかる。口頸部は比較的短かく「く」の字形に外反させ、その端部は外反する凹面をなす。体部は丸味をもって下方へのびる。焼成甘く胎土粗質。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

(9)復元口径 11.4 cm, 残存高 3.8 cm をはかる。口頸部と体部の破片である。口径端部で屈曲させ肥厚し丸味を出している。いわゆる無頸壺に近い形態である。焼成良好堅緻、胎土密。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

(10)底径 4.5 cm, 残存高 3.0 cm をはかる土器底部である。縦方向のナデ調整がみられる他は、何ら特徴はない。焼成良好堅緻、胎土は密、1 mm 前後の白色砂粒を含む。

＜井戸 2 (SE 002) ＞

(11)復元口径 23.2 cm, 残存高 3.0 cm をはかる広口壺形土器の口頸部片である。口頸部はななめに広がるもので、口頸端は外側下方へ肥厚する。口頸端面に簾状文を配する。体部以下は欠損のため不明。焼成は甘く粗質、胎土は密、雲母、石英片を少し含む。

＜溝 6 (SD 006) 出土＞

(12)復元口径 15.7 cm, 残存高 3.1 cm をはかる壺形土器の口頸部の破片である。口頸部は大きく「く」の字形に外面し、端部はななめ方向の平面をなす。口頸部面はくの字形を呈する簾状文がみられる。焼成良好、胎土やや粗、3 mm 前後の白色砂粒を含む。

＜井戸 2 (SE 002) ＞

(13)復元口径 24.6 cm, 残存高 2.6 cm をはかる広口壺形土器の口頸部片である。口頸部はななめ方向に外面なもので、端面は下方にやや拡張する。口頸内面、および端

面に波状文を配している。焼成良好堅緻、胎土密、1mm前後の砂粒を含む。

＜表 採＞

⑩復元口径 20.8 cm、残存高 6.5 cm をはかる広口壺形土器の口頸部の破片である。基部太くななめに広がる頸部を有し、口頸端部では大きく外方へ屈曲させている。口頸端面に波状文、端部外面に波状文、簾状文を各々配している。焼成良好堅緻、胎土密。

＜表 採＞

⑪口径 19.8 cm、残存高 11.5 cm をはかる広口壺形土器の一部である。口頸部は端部で大きく外方へ屈曲させ端面をなしている。口頸部はゆるやかに外面し、外面にややあらい波状文を 2 本配している。口頸端面には簾状文を伴う。体部の肩のはりはなく、なだらかに下方へ下る。体部には、ヘラ描の凹段文を配する。内面には縱方向のナデ調整がみられる。底部は欠損しており不明とせざるをえないが、⑩が同一遺構から検出されており同一個体の可能性もある。

＜井戸 2 (SE 002) 出土＞

⑫復元口径 31.7 cm、残存高 13.5 cm の大形の広口壺形土器である。外面する口頸部は、その端部で大きく内方へ屈曲する。さらに端部では下方にも拡張している。口頸部端面の上方と下方にそれぞれ 1 条づつの簾状文、頸部外面に櫛描直線文を配する。底部は不明であるが、⑩と全く同一地点で採集されており、胎土、焼成とともに酷似しており、同一個体の可能性がきわめて濃い。

＜表 採＞

⑬復元口径 10.1 cm、残存高 4.2 cm をはかる壺形土器の口頸部の破片である。外反する口頸部は端部で大きく外反させ斜め方向の端面をつくり、下方にやや拡張する。口頸端面には簾状文、口頸部内部に円形浮文、頸部に櫛描直状文を施している。焼成良好堅緻、胎土は密で、黒雲母片を含む。

＜住居跡 3 (SB 003) 周辺出土＞

⑭復元口径 14.6 cm、残存高 4.2 cm をはかる短頸壺形土器の口頸部破片である。内縁気味に上方へのびる口頸部は、その端部で内傾する面をなしている。外面には刺突文三本を配し、その上面に千鳥状に円形浮文を施している。焼成良好堅緻、胎

土やや粗質で、3mmの砂粒を含む。

＜井戸2（SE002）出土＞

②復元口径16cm、残存高3.9cmをはかる短頸壺形土器の破片である。内縁気味にのびる口頸部の端部は内傾する平面をなし、内外両面にのばし稜をなす。外面にはヘラ描の綾形文を配し、その上に円形浮文を貼付する。焼成甘く軟質、胎土やや粗。

＜井戸2（SE002）出土＞

④復元口径19.4cm、残存高15.4cmをはかる壺形土器である。口頸部はくの字形に外反し、さらに端部を内方へ屈曲させ上下両面に稜を有し、外端面に凹面をなす。体部はなだらかに下り、その最大径を%前後に求めるものである。外面には、やや粗いカキ目、内面にはハケ目調整が各々施されている。焼成良好堅緻、胎土はやや粗である。

＜住居跡3（SB003）周辺出土＞

③復元口径26.3cm、残存高5.3cmをはかる広口壺形土器の破片である。口頸部は外彎してのび、端部で上方へわずかに屈曲させ、上方に稜を残す。口頸部端面外に刻み目が施されている。頸部外面にヘラ描直線文が施されている。焼成良好堅緻、胎土密。

＜表 採＞

④復元口径27.7cm、残存高11.1cm、復元体部最大径32.4cmを各々はかる壺形土器である。口頸部は短かく「く」の字形に外反し、端部で上下にのばし稜をなす。体部はゆるやかに下と肩のはりは、殆んどみられない。体部外面に縦方向のカキ目調整を施している。焼成良好堅緻、胎土密。

＜井戸2（SE002）周辺出土＞

⑤復元体部最大径42.2cmをはかる広口壺形土器の体部片である。体部外面には櫛描直線文が施されている。焼成良好堅緻、胎土密。

＜井戸2（SE002）出土＞

⑥最大径4.6cm、高さ7.2cmをはかる把手状の土器片であるか、あるいは何らかの器形の脚部であろう。

＜溝5（SD005）周辺出土＞

⑩底径 3.9 cm, 残存高 3 cm をはかる壺形土器の底部である。外面には平行叩きの痕が明確に残るものであり、既述各例が弥生中期（Ⅲ～Ⅳ様式）であるのに対し、明らかに弥生時代後期に属する遺物である。

＜井戸 2 (SE 002) 周辺出土＞

土師器 (PL 17, 33)

⑪脚基部径 3.1 cm, 残存高 4.8 cm をはかる土師器高杯の脚、および底部である。脚は「ハ」の字形に外反し、その下方に円孔を穿っている。底部は比較的尖った如き印象を与える丸底である。内面には縦方向のナデ調整がみられる。焼成良好堅緻、胎土密。

＜表 採＞

⑫口径 22.1 cm, 器高 18.1 cm, 体部最大径 28.8 cm をはかる土師器鍋である。口頸部は内巻気味にちぢまっており、その端部でわずかに外方へ屈曲させ直立している。体部には丸味を有し、その最大径をはかる部分の左右に手づくね状の把手を付す。把手下方に横方向のハケ目がみられ、部分的に縦方向のものもみられる。体部の底部よりで斜交するハケ目がみられるが、底部では摩耗しており全くその痕跡を認めない。内面には指オサエの痕がみられるが、他の調整手法は全くみられない。なお土壤 1 (SK 001) で破粹された形で出土しているが副葬品として大過ないものと考えられる。焼成良好堅緻、胎土密。

＜土壤 1 (SK 001) 出土＞

須恵器 (PL 18, 34)

器種としては、蓋杯、高杯、椀、器台、壺、甕のいずれも細片である。そのうち図化可能なものは、図版 (PL 18, 34) に示した25点である。以下、各器種について特徴を記述したいと思う。

蓋杯

蓋は、図化可能なものの5点出土しているが、大別して四形態に分類される。すなわち稜の明瞭に遺存するもの(1)、やや退化しているが稜がみられるもの(2)、さらに退化して沈線状となっているもの(3)があり、他の2例は、その痕跡もみられない。また口頸部に段を認めるもの (1, 2, 3) と丸く仕上げられているものがあり、形

態的な区分に従えば陶邑編年Ⅰ型式5段階(1), Ⅱ型式1段階～2段階(2), 同じく6段階(10, 11)（以下の型式分類も陶邑編年による）と分類される。なお、口径が小さく陶邑例の蓋杯の身とは、異質の感を与えるもの(3)もある。

杯身は、8点出土しており、大別して三形態に分類される。それは、たちあがりが高く、端部に段を残すもの(4), たちあがりが短かく端部が丸いもの（5～9, 12）口径が小さく、たちあがりが短かく端部が丸いもの(3)がある。

杯身のうち古い形態と考えられるもの(4)については、先述の蓋(1)とほぼ対応するものと考えられる。最も量の多いもの（5～9, 12）については、陶邑編年Ⅱ型式3段階（5, 6, 7, 9）4段階（8, 12）に型式分類が可能である。

いずれにしても蓋杯とともに形態、手法、胎土などにとくに、異色なものはみられず、和泉陶邑窯からの供給品と考えて大過ないと考えられる。

椀

口径の大きい底にわずかに丸味を有する椀が1点出土している。軟質で白灰色を呈するが、胎土焼成が土師器のそれとは異なり、所謂須恵器の生焼けであることが判る。Ⅱ型式に属するものと考えられる。(4)

高杯

長脚二段すかしを有する。高杯の脚基部の細片(5)と、短脚高杯（16, 他）の破片2点が出土している。前者は、その遺存状況から二方透しであったと考えられる。後者は、有蓋高杯の末期的形態である。前者がⅡ型式3～4段階、後者が5段階頃に分類される。

壺

短頸壺の口頸部と考えられる細片と台付長頸壺の脚部2点の計3点が出土している。いずれも、細片化しておりその復元値については問題があり、すべてについてやや大きい感を与えていることは否めない。

台付長頸壺の脚部のうち、よくみられる例(6)はⅡ型式3段階、やや特殊なもの(7)は若干時代が下ると思われる。また短頸壺は本来有蓋であり、その形態からⅡ型式の後半段階のものと考えて大過ないだろう。

提瓶

提瓶の頸部縫目を含む細片がある。従って口径やその大きさについては、殆んど推察しえない。なお、その脚部の径は円弧のカーブから約13cm前後と推察される。脚部はふくらんだ丸味のあるもので、同器種の古式の形態ではない。

おそらくは、小型化の傾向がみられるⅡ型式4段階以後のものと考えられる。

不明（器台）

その端部の状況や文様からみる限り壺とはならないものである。従って、やや問題があるが小型に属する器台の杯部端と考えておきたいと思う。外面には斜め方向のヘラ描文が認められる。⑩

壺

いずれも小、中型の壺である。口縁部の破片5点と体部片が若干出土している。とくに基部から端部にかけて大きく外反する口頸部を有するもの（22, 24）あるいは外脣気味にのびるもの（21, 23, 25）がある。また端部で一方へ大きく屈曲させ丸味をもたせるもの（21）や、内面に折り込み、口頸部外方にやや肥厚させるもの（24）外方へ大きく屈曲させるもの（22）端部を丸く仕上げるもの（23）などその形態は多様である。しかし、口頸部外面には、全く文様を伴うことなく、わずかにハケ目調整の痕のみられるもの（25）があるのみである。肩部が遺存するものは、三例であるが、その叩き目文様をも確認しえるのは一例のみである（25）。それは、外面を平行叩きの後、回転カキ目調整を施しており、内面は円弧叩きが明確に残るものである。なお、他に多数の壺体部片が出土しており、いくつかの異なる叩き板の使用が確認されている。それらは、いずれも平行叩きを用いており、特に注目するべきものはみられないようである。それらについての説明は本稿では省略に従うこととし、挿図（fig 16）の拓影等を参照されたいと思う。

その他の遺物

以上、記述してきた以外に、埴輪、屋瓦、土師質土器、砥石などが検出されている。以下に各々についての観察、検討を行う。

埴輪（fig 16）

（1）長径10cm、短径8.0cm、厚さ1.3cmをはかる円筒埴輪の破片である。その遺存部の中程に、かなりくずれた形の突帯（タガ）が巡っている。その径は約2.5cm、

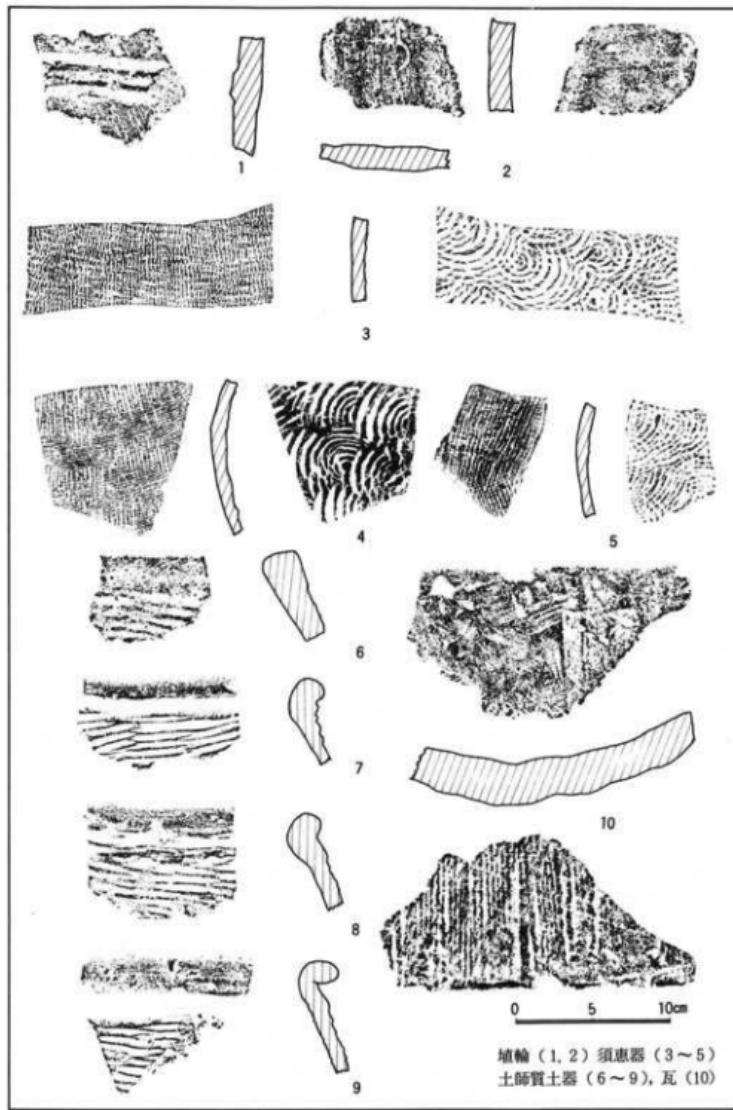


fig. 16 遺物拓影および実測図

厚さは0.4cmを各々はかる。突帯は、円筒部成形後、貼付されたもので、いわゆるナデつけた痕が明瞭に残っている。突帯の上下には縦方向のハケによるナデ調整の痕が残っている。なお施文原体の幅は約2cm前後と考えられるが、あまりにも小さい遺存であるため問題はある。焼成良好堅緻、胎土、密、白色砂粒を含む。

〈北部遺構、表採〉

(2)恐らくは形象埴輪の体部と考えられる長径8cm、短径5.8cm、厚さ1.1cmをはかる破片である。表面にはハケ目調整の痕が残っているが、摩耗が著しく明瞭なものではない。焼成は甘く軟質、胎土、密、白色砂粒を含む。

〈溝4（SD004）周辺〉

屋瓦（fig 16-10）

(1)長径17.4cm、短径10.2cm、厚さ2.5cmをはかる平瓦片である。内面には、布目を残し、外面には平行な繩虁文を施す。内外面ともに摩耗が進行しており、当該地区的遺構に伴っていたものかどうか疑わしい。焼成良好堅緻、胎土やや粗、時代は平安～鎌倉頃と考えられる。

〈表 採〉

土師質土器（fig 16）

(1)長径7.5cm、短径6.2cm、残存高5.5cmをはかる土師質土器の甕口頸部片である。口頸部は、やや内傾気味で、端部は平らである。口頸部で肥厚させ、断面は逆台形を呈している。外面には、ややあらい平行叩きが施されている。焼成は良好堅緻で、胎土は、やや粗で白色砂粒を多く含む。時期は不明であるが中世段階のものではないだろう。(6)

〈溝1（SD001）周辺出土〉

(2)長径9.7cm、短径5.7cm、をはかる土師質土器の甕口頸部である。口頸部は内傾したのち端部で外反させ肥厚している。外面には、あらい平行叩きが施され、内面はハケ目の調整痕が認められる。焼成良好堅緻、胎土は密である。時期は他所から出土する相似例から判断して鎌倉～室町時代頃と考えられる。(7)

(3)長径9.7cm、短径7.0cm、復元口径7.0cmをはかる。土師質土器の甕の口縁部片である。口頸部は、内傾したのち外反するもので、端部でおりかえして肥厚して

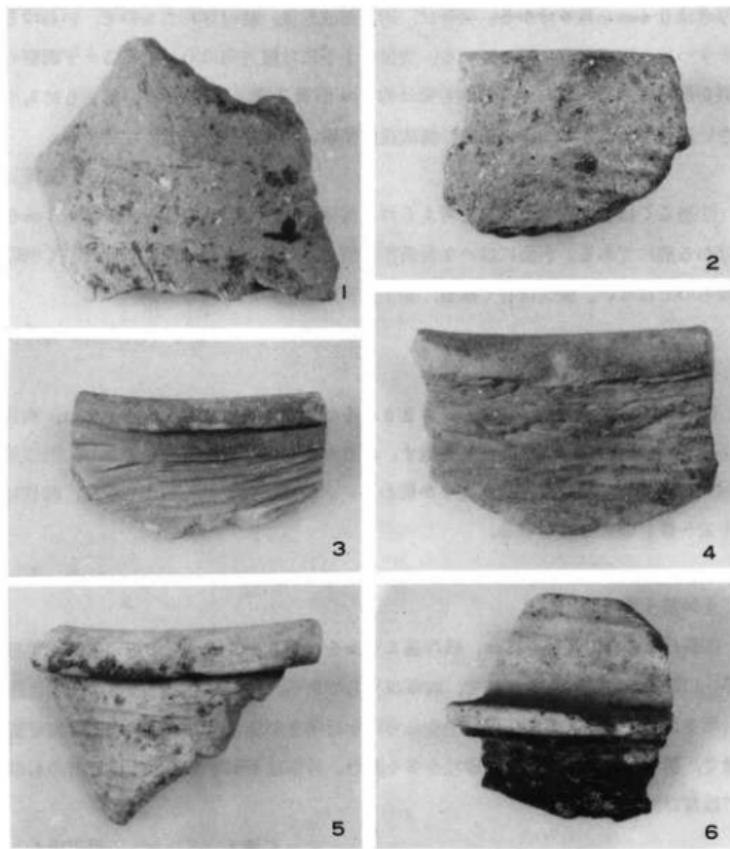


fig. 17 遺物写真 塙輪(1)土師質土器 (2～5) 土釜(6)

いる。前者よりは、厚手の感を与える。外面にはあらい平行叩きがみられ、内面にはハケ目調整の痕がわずかに残っている。焼成は良好堅緻で須恵器を思わせる。胎土は密で細かい白色砂粒が多く含まれている。時期は、鎌倉～室町時代頃と考えられる。(8)

(4)長径 10.0 cm, 短径 8.1 cm, 残存高 7.8 cm をはかる土師質土器の甕、口頸部で

ある。内傾する口頸部は、部で大きく外方へ屈曲させ外方へ丸く張り出している。外面には、あらい平行叩き、内面にはヨコ方向のカキ目調整が比較的整然と施されている。焼成良好堅緻で胎土密、わずかに白色砂粒を含む、時期は鎌倉～室町時代頃と考えられる。(9)

＜表 採＞

(5)長径 7.7 cm、短径 5.7 cm をはかる土師質土器、甕口頸部の破片である。表面は風化による剝離によって遺存度がきわめて不良である。焼成良好堅緻、胎土はやや粗く、砂粒を混えている。時期は鎌倉～室町時代頃である。

＜表 採＞

土釜 (fig. 17)

長径 6.8 cm、短径 5.1 cm、残存高 6.5 cm をはかる土師質土釜の破片である。口頸部は、内傾し大きく三つの段をなす。突帶（つば）は長さ約 1.7 cm、厚さ 0.5 cm を各々はかり、ほぼ水平に外方へ張り出しており、その端部は垂直な凹面をなす突帶の下方から体部にかけて煤が付着しており、本例が火へかけられた実用品であったことを示している。体部にヘラ削り調整がみられ、内面にはナデ調整がみられる。焼成は良好堅緻で、胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。時代は前述土師質土器とよく共伴して出土することから、鎌倉～室町時代頃と考えてよいだろう。

＜表 採＞

砥石 (P L 16)

長径 24 cm、短径 18 cm、高さ 15 cm をはかる砂岩である。中央部に幅 10 cm、長さ 13 cm の摩耗痕がみられ、当該砂岩が砥石として用いられたことを知る。

＜井戸 1 (S E 001) 出土＞

(中村 浩、青木昭和、山本百合子)

第5章 考察

1. 遺跡の立地条件の復元的考察

——とくに石川中流域の先史遺跡の立地について——

はじめに

石川中流域すなわち現在の市町村呼称でいえば、富田林の大半がそれに該当する部分であり、一部羽曳野市を含む。この地域の先史時代集落遺跡の調査は、下流域のそれに対して著しくおくれている事実については、既に述べたところである。しかし現在の状況からそうであるといつても、必ずしも出発点についてみればそうではない。中野遺跡については明治年間にその萌芽がみられるものであり、著名な国指定史跡国府遺跡（藤井寺市）の発見と大きく距離をへだてるものではなかった。また隣接する喜志遺跡についても、京都大学による大正年間の報告などがある。それらの研究はあったとしても、その後の追及が殆んどなかったといえる。本書で既に紹介、記述してきた内容は、それらを進める上での重要な資料となることは秘かに自負するところであるが、さらに目を転じて石川中流域という範疇でみれば、再び先の問題へと戻らざるを得ない現状である。

本稿では、この問題を一步でも進めるための一方法として、石川中流域の旧地形を現在の地形から考えられる範囲のなかで復元し、かつての地形環境がいかなるものであったかについて考え方とするものである。幸い当該地域は、近時宅地開発の大きなうねりがおよよせつつあるが、まだその地形に大きな変化を被っていないと考えられるところが多く残っている。すなわち、そこから復元される地形条件とかつての状況との間に大きな差が生じる可能性が、比較的少ないものと考えられる現状がある。以下具体的にその地形と復元地形にみる遺跡立地について考えたいと思う。

中野遺跡の周辺

中野遺跡の周辺地形について、まずみるとこととする。現状では、周囲の大半が水田となり、一見平坦な感を与えるものである。また東方向の石川へ面する部分も西

側の田畠と若干の比高差を有しながらも、殆んど大きな差異を認めないものである。

富田林市によって、昭和46年に作成され、47年に一部修正された『富田林市都市計画図、其ノ5』によると、石川の西岸にひろがる水田面は、海拔43～49m前後で50mを越える地域はみられない。この平坦面をまずみると、大きく田の畔線が東西に蛇行していることが判る。この傾向は、石川東岸域についても同様であり、これらの畔線の蛇行が石川の氾濫によって生じたことは明らかであり、改めて記述を要しないであろう。その範囲がとくに西部域に大きくみられるのは、その大きなくずれの東南方向で千早川と合流しており、その合流したことによる流水路の変化からもたらされた結果と考えられるのである。

これら直接石川の水によって洗われる水田面から西には5～6mの比高差を保って、上面に台地がひらけている。いわゆる河岸段丘上に位置する部分であり、その地形をみると東北が低く、西南方向にゆるやかな傾斜をもって高くなっている。ただし、この台地は西北部での傾斜がわずかながら大きいことが指摘される。すなわち、ゆるやかな殆んど傾斜を感じさせない平坦部分は、東西400、南北500mの範囲である。現在この東限と考えられる部分を深溝用水という用水路が南北に通っている。

さらにこの平坦部分の北部には、南東方向に開口する比較的深い谷が復元される。この谷の奥部には栗ヶ池があり、同池の約100m以上をはかる南堤の存在は、その谷をせきとめて作ったことを示している。

この栗ヶ池の東には、その南でみたと同じく平坦な土地が広がっており、北方へのびている。一方、池の西側では比較的傾斜面が認められ、丘陵部が迫っている状況がよく観察される。この旧地形復元から集落立地の可能性、あるいは最もその立地に適する地を選定するとするならば、先述の栗ヶ池南部の東西400m、南北500mの平坦部といえるだろう。

中野遺跡の調査結果からみると、78年大谷女子大学が調査した中野遺跡D4区では、東西方向のV字溝が検出されており、その周辺の地形復元をみると、その部分は谷に面した台地端に近い個所ということになる。きわめて小範囲の知見であるため速断はさしつかえねばならないが、溝の方向は、その地形復元でみると、谷

に面した台地端にきわめて近い個所ということになる。すなわち溝の方向は、その地形推定と同じくほぼ西方向へ斜めにのびていくようであり、注目に値するだろう。これと同様の遺構は、喜志遺跡でも確認されており、その推定に大過ないとすれば、この溝を集落端の境界とみることが可能である。いいかえれば中野遺跡の北端に近い部分が当該D4地区周辺と考えられるのではないかと思われる。同様に喜志遺跡の南限についての調査結果が明らかになっていないが、あえて推定すれば、この谷に面した南端までをその範囲とすることが、立地条件からして可能であるが、現在のところ、その地域で遺物が採集されたということを耳にしていない。とりわけ粟ヶ池の北側にみえる桜井町二丁目付近で大きく谷が西に入り込む可能性もある。またこれらを区分する自然境界たる谷は、粟ヶ池を構成する谷よりはるかに小さく狹小なものである。

さらに今回の調査結果から中野遺跡の西限を限定しえるとすれば、先の地形復元からの推定部分よりも、やや狭くする必要があろう。とくに西方へ延長したトレーナーで何ら遺構、遺物を検出せず、地山面の変化がみられないことは、それを証明するのに十分であるといって過言ではない。この推測が正しいとすれば、その遺跡立地は明らかに海拔57～58m前後のところで終わっているといえるのである。これを丘陵傾斜と関係があるとするならば、等高線の間隔から判断して、南限はせいぜい海拔60m前後のところに求められるだろう。

蛇足ながら、粟ヶ池の問題について記述しておきたいと思う。粟ヶ池の東には東高野街道を通じており、この道の開通以前には少なくとも粟ヶ池が完成していたことが推定される。さらに南堤の東西方向にのびる線は、近接地域の条理の畔線と平行しており、条里はこの池の造築と周辺地域の開墾とは時を同じくしているものと考えられる。また既述の調査では条理の年代を推定する遺物、遺構は検出されておらず、今後、残りのよい畔線を含む広範な本格的調査がまたれるところである。

3. 石川中流域全体の状況

目を石川中流域全体に転じてみれば、とくに田の畔線が乱れているところは東側部分である。とくに積石塚の如く径20m前後、高さ15m前後的小丘は、石川氾濫によって流出した土砂、とりわけ礫石を積んだものと推定され、その洪水が著しい

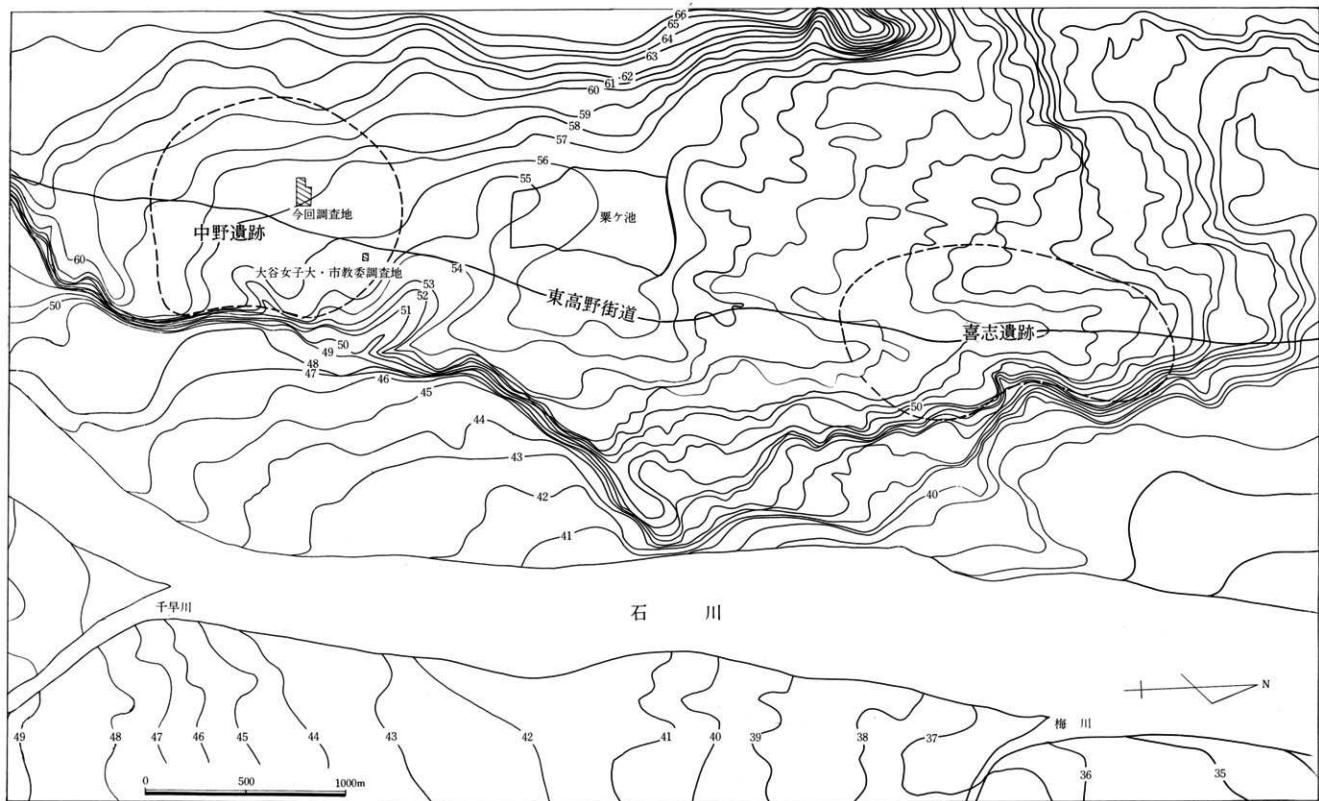


fig. 18 中野遺跡周辺の地形復元図

ことを示している。その状況は等高線をみてもよく看取しうる。すなわち、比較的平坦地であり、南北地域に大きな比高差がみられず、洪水の堆積土砂による可能性が強い。これに反して東岸域は、崖面が石川の近くまで迫っており、部分的には著しい浸蝕を受け、あるいは現在も受けづけているところがある。石川の川床面から河岸段丘上の台地まで、9m前後をはかる。このように比高差をはかるところではあるが、段丘上の台地の面積は先述の北部地域の如き平坦地はきわめて少なく限定される。この傾向は、さらに南部地域でも、同様の状況を呈するところである。河内長野市との境、石川東岸、伏見堂地域でもかろうじて最大限、東西200、南北300mの範囲での平坦地しか求められず、また石川をはさんだ北西部にも東西幅100m前後の平坦地を求めるのがせいぜいという状況である。石川は伏見堂地域附近で大きく蛇行し、現在も西岸を著しく浸蝕しつづけているが、かつての状況を推定する材料は殆んどない。しかし西岸域の丘陵が迫っていることから考えると、東岸域が浸蝕されたと考えざるを得ず、少なからず平坦地が失われたものと考えられる。

一方北へ目を転ずれば、石川東岸では先の石川范瀧原の範囲がかなりの地域、すなわち板持、山中田周辺にまで及んでいた可能性を示唆する。すでにみた如くの石川西岸の平坦地は、約300m前後の間みられず、宮甲田周辺でかなり大きな範囲で平坦地が所在する。とくに宮甲田では舌状に張り出す台地が復元されている。一方、北甲田では石川の段丘面から広範な平坦面をなし、さらに一段高い平坦面という二段にわたる台地面を形成している。

このうち下方の下位段丘は、比較的狭小な範囲ではあるが、平坦地としては、十分集落遺跡が立地可能な部分である。この甲田地域と現在の富林市街地の間には、南東に開口する大きな谷が所在することが復元地形から推定される。すなわち、これによって、甲田地区とその北部域とは明らかに区分されることが判るのである。この部分から北へ約400mの地点が先述の中野遺跡であり、その北部にも大きな谷の所在することについてはすでに述べた如くである。

以上紹介してきた石川中流域の各台地の立地条件は、そのすべてが段丘上に位置し、大洪水の心配は全くないということが確認された。また当該各地域に分布する

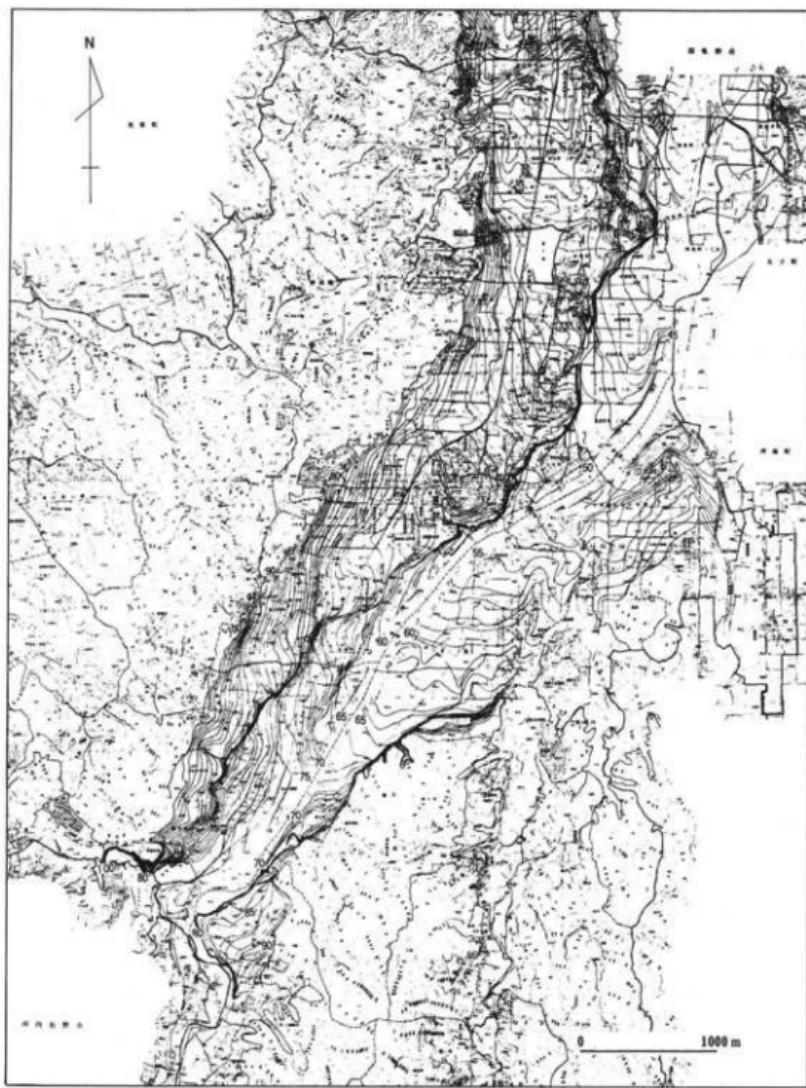


fig. 19 石川中流域の地形（富田林市都市計画図より作成）

遺跡のわずかな調査結果からではあるが、それら遺跡が、いずれも大規模な冠水をこうむっていないことが明らかとなっている。これらから導き出された結論は、明らかにこれら地域の遺跡は洪水を意識し、かつそれをさける意図のもとにつくられたものであるということであり、そのもつ意義は大きいのである。その意義を考える第1段階として、以下に石川下流の大和川下流域の大和川氾濫原に位置した弥生集落との関係について若干の問題を記し、結語としたいと思う。

4. 結語にかえて

すでに石神怡、松田正昭氏らによって大和川の氾濫と旧水系路についての復元が行なわれており、それら先輩諸氏の業績を引用させていただくこととする。この地図は明治年間に陸軍によって作成された2万分の1の地図を原図に行なわれたもので、開墾の著しい同地域の地形を詳細に観察しうる好資料といえる。

この地図によると生駒山麓の水系に、北方に流れるものでは、串田川、長瀬川が大和川付替後も明らかに流水路を保っているものであることが判る。さらに西北方向へは平野川が所在し、かつての大和川の複雑さを如実に示している。これら三つの水系は、ここに示した図によると、いずれも等高線が谷状を呈する部分に該当することが判る。

一方、この水系に囲まれた海拔5～10m前後の平野部には、数多くの遺跡が分布している。串田川と長瀬川の間には、瓜生堂遺跡が所在し、長瀬川と平野川の間には衣摺、久宝寺、龜井などの各遺跡が所在する。これらのうち、比較的調査が進展している龜井、瓜生堂遺跡についてみると、いずれも遺構面上に出水によって出来たと考えられる自然堆積層が存在することが報告されている。自然堆積層は、明らかに周辺河川の氾濫に伴うものであり、そのための被害は著しいものであったと考えられる。地形復元を試みると、全体に殆んど比高差を認めない平坦地であり、また河川面との比高差も、せいぜい1～2mという事が判る。すなわち、このため若干の増水によって水面下に没するということは容易に想像される。言をえれば海拔10m以下の各集落遺跡は、たえず洪水の危険にさらされていたといって過言ではない。

一方、農耕を伴う生活は、低湿地の肥沃な土地を求め、そこに定住せざるを得な



fig. 20 生駒山麓の地形（石神 怡「八尾市龜井遺跡発掘調査概要」1971より）

い状況を生じさせる。この範疇においては、氾濫原がその適地となり、いわば利害相反する条件を内在するという点において初期弥生集落が成立している。河内平野の前期弥生集落も、その例外ではない。すなわち大和川とその支流の氾濫原がもたらす肥沃な土地は、彼らの生活の拠点として最適なもの一つであったと考えられる。これは、各地点の遺跡が前期に成立し、拡大することからも明らかである。

しかし、この肥沃な平野も、中期に入ると既述の如く、大きく遺構の上に堆積層を認めるという大規模な洪水が襲っている。彼らの大半は、その生活拠点を放棄し、新らたな場所への移動をよぎなくされたことは容易に推定される、その移動先については、水系をたどって石川中流域へ、あるいは他の地域へという事が考えられる。すでに紹介した如く、石川中流域の遺跡が、いずれも台地上に形成されている事実は、その前提条件に伴う移住であったとすれば、まさに最適地を得たという事にもなろう。地理的にも近接しており、また水系という一連の系統的な状況もあり、あながち大きくてはずしているとも思えない。

この地への新らたなる定住者は、二上山の豊富なサヌカイト原石をもとにして、石鎌、石槍をはじめとする石製利器の生産に携わり、再び中河内の平野にもどっていった集団との間に流通関係が発生、展開したと考えることも不可能ではない。喜志、中野両遺跡で検出されたきわめて多量の石製品、なかでも未製品の存在などは、それを証明する一資料といえよう。

以上、結語にかえて遺跡の立地環境から考えられる様々な問題について記述を進めてきたが、もとより十分な考証を加えて実証すべき性格のものであることは承知している。今後の残された中野遺跡D4区調査の遺物整理を通じてより一層の発展を期したいと望んでいる。

末筆ながら、本稿のなるに当って多くの示唆をいただいた北野耕平先生に厚く謝意を表したいと思う。(中 村)

2. 中野遺跡出土遺物の蛍光X線分析

1. はじめに

須恵器、土師器、弥生式土器、石器など考古遺物の原産地を明らかにし、かつその流通交流範囲あるいは文化圏をも究明しようとする研究は、近時とみに盛んとなり、その成果も増加しつつある。

とりわけ、その原産地あるいは供給源が明らかな石器、須恵器についての分析、研究が先行し、興味ある問題が提示されるにいたっている。石器については、二上山をはじめとするサヌカイト原産地の各原石にみる元素組成、須恵器については、和泉陶邑窯をはじめとする各生産地出土遺物にみる元素組成の分析が実施され、各々の標準資料の内容が明らかとなっている。これら各原産地(供給源)の各資料分析が終盤に近づきつつあり、各消費遺跡出土遺物について、その供給源の究明も十分可能な状況となってきている。

その原産地(供給源)推定を可能にする元素組成分析の手法としては、放射化分析、蛍光X線分析、X線回析法などがあるが、とりわけ前二者の研究活動が活発である。これらは、いずれも少量の試料で、主成分から微量元素にいたる広範囲の多元素を同時に定量しうる特徴を有するものである。一方、そのうち放射化分析法は、

原子炉による放射線照射を必要とすることから、数々の制約もないとはいえる。比較的簡便な装置で測定可能な蛍光X線分析法による分析手法が、最近ではよく用いられている。

2.

富田林市所在、中野遺跡出土遺物のうち、石器、弥生式土器、土師器、須恵器について、先に掲げた蛍光X線分析法によって、各々の元素組成の分析を実施した。なお測定には、奈良教育大学の蛍光X線分析装置（理学社製、エネルギー分散型蛍光X線分析装置）を用いて行った。

分析に供した各資料は、一部を破碎して粉末化し、プレスしたものを用い、その他のものについては、出来るだけ新鮮な面について測定するように努めた。

それぞれの測定結果を電子計算機によって処理し、サヌカイトについては、すでに明らかとなっている原産地との比較を容易にする元素比、すなわち Fe/SR, Rb/SR, Y/SR、についての値を求めた。さらに、土器類については、同じく供給源の比較を行うため、すでに明らかとなっている元素比 Ti/Fe, Rb/SR、について各々値を求めた。以下に各試（質）料についての測定値（元素比）、各資料の所見について記述しておきたいと思う。

3.

以上の結果を得たが、さらに一步進めて原産地（供給源）推定が可能かどうかについて考えてみたいと思う。

まずサヌカイトであるが、Rb/SR の値が比較的まとまりがよく、非破碎のものとの差も殆どないことが判る。一方、Fe/SR, Y/SR については、前者ではまとまりがよいが、後者については、まとまらないことが判る。これは、No 1 については両者に大差があるが、No 2 については比較的少ないことが指摘される。両者の差は、後者が表面を研磨した面、前者が行う研磨を施さない面というところで生じた差であると考えられる。

これら得られた元素比から原産地推定を行うため東村武信、蒿科哲男両氏によって作成された各原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差について掲げておきたいと思う。（table 7）

試料番号	試料名	Fe/SR	Rb/SR	Y/SR
No 1	サヌカイト, 石核	3.852	0.218	0.079
2	サヌカイト, 石核	3.805	0.218	0.082
3	石 磨	3.146	0.218	0.086
4	"	3.280	0.204	0.084
5	" (未製品)	3.433	0.200	0.092
6	No 1と同じ未破碎品	3.419	0.238	0.104
7	石 槍	3.631	0.220	0.086
8	"	3.038	0.220	0.091
9	"	3.239	0.214	0.109
10	"	3.673	0.216	0.085
11	不定形石器	2.955	0.214	0.090
12	No 2と同じ未破碎品	3.875	0.215	0.080

table 5 石器(サヌカイト)の分析結果

(※は破碎したもの)

試料番号	試料名	Ti/Fe	Rb/SR
No 1	須恵器 養	0.0159	1.406
2	" "	0.0144	1.330
3	" 蓋	0.0125	1.062
4	石包丁	0.0208	0.023
5	"	0.0110	0.177
6	"	0.0217	0.028
7	石 剣	0.0223	0.090
8	No 1と同じ未破碎品	0.0216	1.973
9	弥生式土器, 養	0.0118	0.225
10	"	0.0267	0.504
11	"	0.0120	0.317
12	土師器	0.0094	0.268
13	No 10と同じ未破碎品	0.0611	0.542
14	黒曜石	0.0082	42.010

table 6 石器, 須恵器, 弥生式土器, 土師器

の分析結果

(※は破碎したもの)

これによって先の値を個々の原産地と比較すれば Rb/SR については、二上山群と、いづれもきわめて近似することが判る。さらに Fe/SR についてみれば、破碎した No 1, 2 を除いて大半が二上山群より値が低く、反面 Y/SR については高いことが指摘される。しかし、Fe/SR, Y/SR については個々の値のばらつきも大きく、また表 3 にみる原石群と近似するものも Rb/SR の如きものはみられない。

しかし、試料とするための前操作となる破碎の有無あるいは、両者間による分析装置の異なるという点などの各要因によって、それらのばらつきや差が生じる場合もあり、一概に断じえない点が多く、今後に問題を残さざるを得ない。

ともあれ、これらの分析結果のうち Rb/SR については、比較的まとまりをもっており、かつ二上山群の原石に、きわめて近似するという事を確認したことで、一応の成果とせざるを得ないだろう。

一方、土器群についてみれば、供給源の元素比が明らかとなっているのは、須恵器のみであり、他のものについては、その値にはばらつきが大きく、また比較材料が

原産地名	K / Ca Xi ± σ	Ti / Ca Xi ± σ	Mn / Sr Xi ± σ	Fe / Sr Xi ± σ	Rb / Sr Xi ± σ	Y / Sr Xi ± σ	Zr / Sr Xi ± σ
二上山	0.243 ± 0.008	0.227 ± 0.010	0.018 ± 0.008	4.402 ± 0.174	0.212 ± 0.008	0.056 ± 0.012	0.581 ± 0.020
岩屋第Ⅰ	0.576 ± 0.172	0.249 ± 0.008	0.018 ± 0.007	3.558 ± 0.093	0.369 ± 0.006	0.056 ± 0.010	0.800 ± 0.023
岩島第Ⅱ	0.482 ± 0.016	0.269 ± 0.007	0.019 ± 0.006	3.399 ± 0.068	0.337 ± 0.007	0.044 ± 0.008	1.038 ± 0.023
国分寺	0.408 ± 0.015	0.259 ± 0.008	0.014 ± 0.006	3.558 ± 0.060	0.304 ± 0.009	0.040 ± 0.011	0.937 ± 0.025
蓮光寺	0.418 ± 0.013	0.255 ± 0.009	0.0114 ± 0.005	3.541 ± 0.059	0.303 ± 0.007	0.043 ± 0.012	0.941 ± 0.022
白峰	0.487 ± 0.014	0.268 ± 0.008	0.014 ± 0.008	3.348 ± 0.067	0.339 ± 0.009	0.041 ± 0.011	1.033 ± 0.023
法印谷	0.349 ± 0.013	0.244 ± 0.009	0.017 ± 0.008	4.590 ± 0.119	0.283 ± 0.010	0.066 ± 0.013	1.105 ± 0.025
金山西	0.367 ± 0.014	0.223 ± 0.009	0.028 ± 0.009	4.691 ± 0.122	0.291 ± 0.010	0.064 ± 0.008	0.035 ± 0.022
金山東	0.437 ± 0.016	0.230 ± 0.006	0.019 ± 0.008	4.496 ± 0.049	0.320 ± 0.012	0.064 ± 0.009	1.133 ± 0.030
冠高原	0.592 ± 0.015	0.533 ± 0.011	0.007 ± 0.005	3.000 ± 0.195	0.188 ± 0.016	0.022 ± 0.010	0.418 ± 0.042
冠山東	0.248 ± 0.014	0.397 ± 0.030	0.002 ± 0.001	1.548 ± 0.041	0.048 ± 0.005	0.176 ± 0.037	0.368 ± 0.038

table 7 各原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

Xi : 平均値 σ : 標準偏差

なく割愛しなければならなかった。なお須恵器については、Ti / Fe, Rb / SRの値とともに、和泉陶邑群に近似するものであった。

4.

以上、中野遺跡出土遺物のごく一部のものについて蛍光X線分析によって元素比を求め、さらに原産地との値とを比較してみた。もとより出土遺物のすべてについてではなく、ごく一部の限定したものを対象としたため、その詳細についての判断は不可能である。

しかし、この手法によって中野遺跡出土石器の原石が、二上山群から提供されていたことが判り、指呼の距離の関係ではあるが、改めて確認されたことは意義あるものである。同様に須恵器についても近接地からのものであり、その交流圏の再確認ともなった。

いずれにしても、今後は量的なひろがりをもつ作業を蓄積し、さらに面への拡大をはからねばならないことを痛感する。

末筆ながら種々ご教示を得た京大原子炉実験所、萬科哲男氏に謝意を表したいと思う。

(中村 浩, 三辻利一)
(奈良教育大)

あとがき

1

中野遺跡が学界に初めて紹介されたのは、大阪府下ではまだ遺跡の発見が寥々としていた1892年のことで、当時『人類学会雑誌』に「河内における石器の新発見地」と題して、山崎直方博士が石器の採集を報じた。もちろん富田林市内における遺跡の最初の発見であった。ところが1918年に京都大学から『河内国府石器時代遺跡発掘報告』の付編として「河内国南高安及び喜志石器時代遺跡調査」が刊行され、中野遺跡から北方に2キロ離れて羽曳野市に跨る台地上の喜志遺跡が人口に膾炙することになり、中野遺跡はその後70年余に亘って忘却される結果となった。

われわれがこの中野遺跡から遺物を発見し、先学の業績を再認識したのは1970年のことで、浅いV字状遺溝の中に中期の弥生式土器と各種石器が遺存し、上層から土師器・須恵器が出土することを確かめた。このV字状遺溝は引続き1978年に大谷女子大学で発掘を試みて豊富な遺物が出土し、遺物の内容を具体的に検討する資料としたのである。今回報告するのは上記の地点から200メートル南西方に離れた造成予定地で、弥生式土器、サヌカイト製石器、緑泥片岩製石包丁、同石剣などの遺物と共に、同地域内から弥生住居址と推定される遺構を明らかにし、少量ながら土師器・須恵器の資料も出土した。片鱗とはいえ集落遺構が確認されたことにより、從来地表面に散布した遺物の分布調査から遺跡の範囲を漠然と推定していたのが、当時の生活空間を再現して隣接する喜志遺跡との比較も可能になったわけで、その成果を評価できると考える。

近年各地で集落遺跡の調査が行われ、生活の場として、さらに葬祭の場として社会環境の復原的研究が進みつつあり、花粉分析など植生の調査と併せて環境考古学(Environmental Archaeology)の分野が確立した観がある。本遺跡の詳細な検討は本文中に記されたところに尽きているが、ここでは市内の遺跡を見間してきた一人として、大阪湾岸の内陸地帯ともいるべき河内地域の中での巨視的な位置づけと、石川谷中流域の丘陵に囲まれた地域社会内部の集落の微視的な変遷を取り上げて、若干の問題を提起しておくことにしよう。

中野遺跡は喜志遺跡と共に石川左岸の河岸段丘上に形成された集落遺跡である。この点で北方の河内平野に位置する東大阪市瓜生堂遺跡や遺物の堆積を主とした八尾市亀井遺跡など、旧大和川によるシルトの微高地上に営まれた低い立地とは異なっている。弥生時代の生業が水稻栽培を中心とする農耕であったために、むしろ低湿地を占める瓜生堂や亀井が日々の生産活動に適しているのに対し、この中野喜志のように現石川の河床面から15メートルも高い不便な台地上に集落を営み、水利の便に恵まれた低地をあえて耕地として求めた理由を改めて考えねばならない。

瓜生堂遺跡の集落は弥生前期に始まり、中期初頭になって突然放棄されてしまう。中期中葉になって再び続けられるものの、中期末にはまた放棄されて古墳時代に入るまで中絶することが、土器型式の編年から推測できるという。放棄の事情を裏付けるのが、中期の包含層上に堆積した暗灰色粘土層と細砂層および厚さ1.5メートルにも達する砂礫層であるとすると、河内平野の肥沃な沖積地が沼化して水没を始めた時期に、突然大量の土砂を流す大洪水が襲ったからであろう。大和川の水系にこうした自然災害が生じて沿岸の集落を消滅させ、弥生人の移住を余儀なくさせたと考えると、上流の石川は丘陵地帯を流れている点で流域も短かく、安定した環境を保証したのではないかろうか。

中野や喜志などの河岸段丘上に中期になって集落が営まれる一因として、筆者は「河内平野が前期の段階で開発され尽した結果、弥生人たちの奥地への開拓的進出が始まった」というよりも、河内平野の自然条件を制御しきれなかったために、不幸にも反復して襲った洪水の影響に対して、一層安全な可耕地を求めての移動」があったのではないかと考えたのである。

しかしこれら河岸段丘上の集落は出土遺物の中に興味ある特色をもっている。石鎌などサヌカイト製の打製石器と石屑を大量に出土するという事実である。瓜生堂遺跡の場合、発掘の総面積2500平方メートルと遺物採集地400平方メートルの両方を併せて、僅かに155点の石器しか出土しなかったと報告されているのに対して、喜志遺跡の場合は石鎌をはじめとする数千個のサヌカイト製石器と夥しい同石屑と

を出土している。この理由は喜志遺跡から東方5キロにある二上山の西麓と北麓の一帯に、サヌカイトの原石が大量に産することと深い関係があるとみられる。筆者は1971年に喜志遺跡試掘のさい、1832片のサヌカイト石屑を採集して、大きさと重量から分類したところ、最大長11.8センチ、重さ258gから0.8センチ、重さ0.5gまで各種の剝片が含まれ、重さ4.4～1.0gの範囲が最も多くて750個を占めることを知った。もっと微細な石屑は残念なことに採集する手段がなかったが、包含層中に相当量含まれていたことは間違いない。石屑はどの遺跡でも認める遺物であるとはいへ、喜志遺跡では格別に多く、完成品の石器と相俟って加工工程で原石から割截剥離したこれらの剥片からみると、喜志遺跡は特に打製石器の生産工房としての機能を果たしていたことが推定でき、一説のように弥生中期の段階で集落間の戦闘が激烈であったため、武器として急拠準備された石器であると臆測することはこの遺跡の石器の解釈として当を得ていない。

しかもこれは喜志遺跡だけに限ったことではなく、この中野遺跡でも大谷女子大学の調査のさい中村浩氏によって、大量に出土したサヌカイト片が丹念に採集されている。これらの資料が今後、分類検討されて、中野遺跡でも同様なことがいえるかどうか興味があり、同時に打製石器の調整技法を解く鍵がこのネガティブな破片から得られて、新しい視野から問題を掘り下げて成果となることを期待している。

河内南部では藤井寺市国府遺跡が集落遺跡として著名であるが、石川谷の段丘上に点々と分布する集落遺跡の調査はまだ緒についたばかりであり、大規模に調査された河内平野の集落遺跡に対比して、どのような変遷と特色が指摘できるか、将来の大きな課題であろう。

(北野 耕平)

参考文献一覧

- 1) 梅原末治、島田貞彦「河内国南高安及び喜志石器時代遺跡調査」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2編 1917
- 2) 北野耕平「錦織繩文遺跡について」『古代学研究』第5号 1951
- 3) 北野耕平「考古学よりみた富田林市誌」 1955
- 4) 浅野 清、藤沢一夫、坪井清足他「河内新堂・鳥含寺跡の調査」大阪府文化財調査報告第12輯 1960
- 5) 藤 直幹、井上 薫、北野耕平「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室報告 第1編 1964
- 6) 井藤 徹「鍋塚古墳発掘調査概要」 1966
- 7) 北野耕平、堀江門也「富田林市板持古墳群調査概要」 1967
- 8) 野上丈助「河内の古墳」 1968
- 9) 堀江門也、青原正明「河南町東山所在遺跡発掘調査概報」 1969
- 10) 田代克己、井藤 徹、谷本 武「南河内石川流域における古墳の調査」大阪府文化財調査報告 第22輯 1970
- 11) 置田雅昭「南河内発見の有茎尖頭器一例」『古代文化』22-3, 1970
- 12) 中村 浩「大阪府富田林市竜泉出土の藏骨器について」『考古学雑誌』55-3, 1970
- 13) 渡辺 誠「大阪府富田林市錦織出土の繩文土器」『古代文化』23-3, 1971
- 14) 石神 怡他「八尾市亀井遺跡発掘調査概要」 1971
- 15) 田代克己他「平古墳発掘調査概要」 1972
- 16) 北野耕平「富田林市史」第4巻、史料編1, 1972
- 17) 田代克己、中西靖人他「瓜生堂遺跡」資料編I, II, 1972, 1973
- 18) 松井忠春「富田林市出土の藏骨容器」『古代研究』1, 1973
- 19) 中村 浩、峯 正明「菱子房遺跡発掘調査概要」 1973
- 20) 中村 浩「龍泉寺千手院跡発掘調査概要」 1974
- 21) 堀田啓一「河内考古学散歩」 1975
- 22) 三辻利一「ケイ光X線分析法による大阪陶邑窯跡出土須恵器の研究」『陶邑I』, 1976
- 23) " " 「大阪陶邑出土須恵器のケイ光X線分析」『陶邑II』, 1977
- 24) " " 「大阪陶邑出土須恵器の放射化分析」『陶邑III』, 1977
- 25) 網干善教、藤原 学他「大師山」関西大学考古学研究室報告第5編, 1977
- 26) 北野耕平、竹谷俊夫「富田林市の埋蔵文化財—埋蔵文化財基本分布図—」 1978
- 27) 石神幸子、酒井龍一他「池上遺跡」石器編1, 2, 1978
- 28) 中村 浩「陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑IV』, 1978
- 29) 渡辺昌宏、芝野圭之助「喜志遺跡発掘調査概要」 1978
- 30) 東村武信、萬科哲男他「石器原材の产地推定とそれによる西日本文化圏の研究」、『自然科学の手法による遺跡、古文化財等の研究』, 1978
- 31) 佐原 真、井藤曉子他「池上遺跡」土器編, 1979

以上の他、当該報告と関連のある文献は多数みられるが、主として参考にしたものについてのみ掲げている。なお著者、編者については、出来る限り掲載したが、多数の場合は省略に従ったものもある。併せてご諒解いただければ幸いである。

Nakano Site

The cultural changes from the life of collecting things such as hunting and fishing to that of producing things such as farming brought about the amazing changes from the precariously moving way of life to the definitely settled way of life. The Yayoi Period set in with the cultivation of the rice field and the plentiful harvest. The sites in the early Yayoi Period in Osaka area were founded at low and swampy lands or small hills, looking down upon the valleys, not on the districts of the upper stream of the Ishi River. In the course of time they had undergone considerable changes. Nakano Site, was made at the middle of the Yayoi Period. It was situated at Tondabayashi, Osaka. And it was one of these sites to which, because of the natural calamity, the people were forced to move. In fact, climatic changes caused the people to move to the safer places than ever, because the earlier villages were carried away by a great flood.

This evidence is shown in the fact that especially around the basin of the Ishi River are there many sites, to say nothing of Kishi Site, which belongs to the middle of the Yayoi Period. As a result of this excavation, we could find some relics which might be supposed to be pitholes, tombs, and all that.

Nakano Site is furthermore the place where stone implements such as a flint arrowhead or a flint spearhead were made, with the use of the treated *samukite* which is the rough stone collected at Mt. Nijo, standing close to Nakano Site. So many pieces or splinters of stones which were left half done in processing may illustrate this fact. The other relics are slate knives, whetstones, Yayoi pottery, spinning wheels, and so on.

P L A T E



位置図（中野遺跡各調査地点と周辺の遺跡）



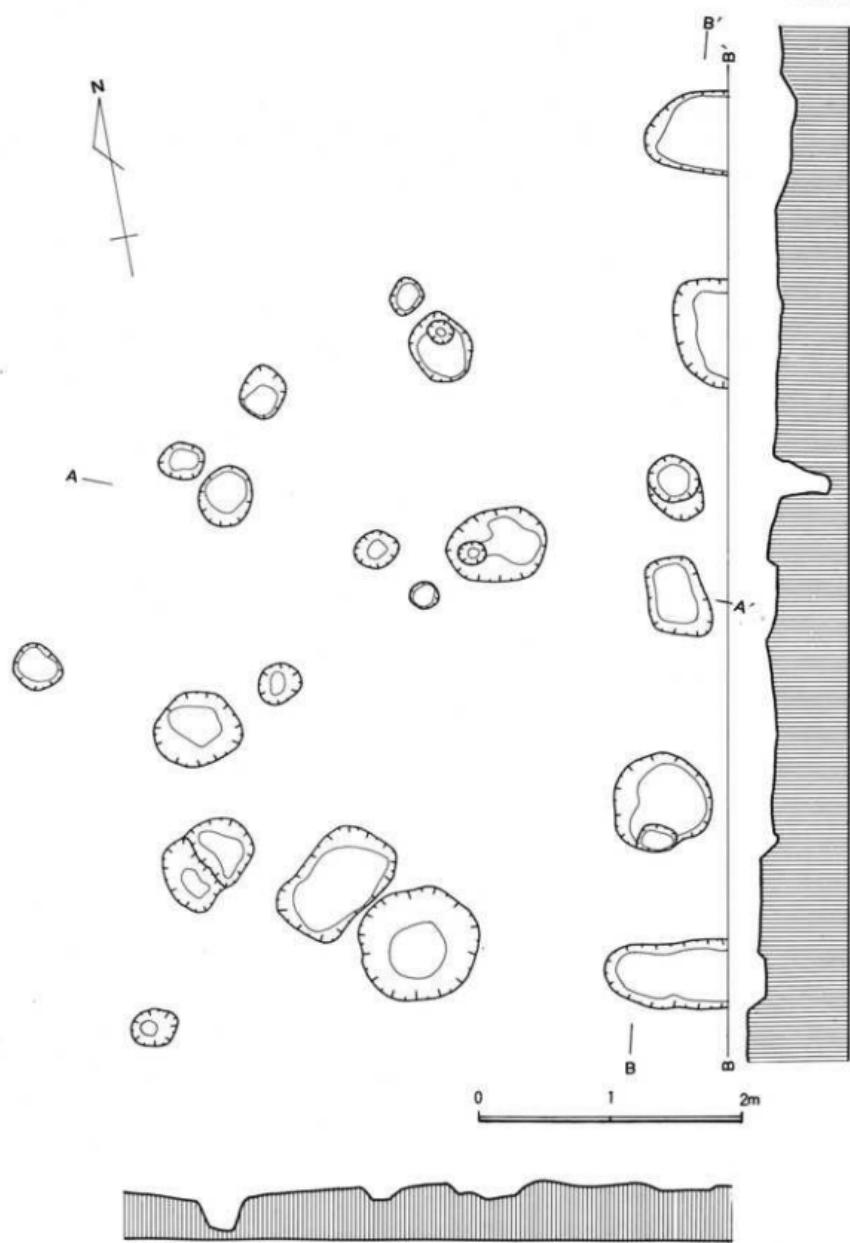
位置図（中野遺跡の周辺—富田林市都市計画図 其ノ5一部分）



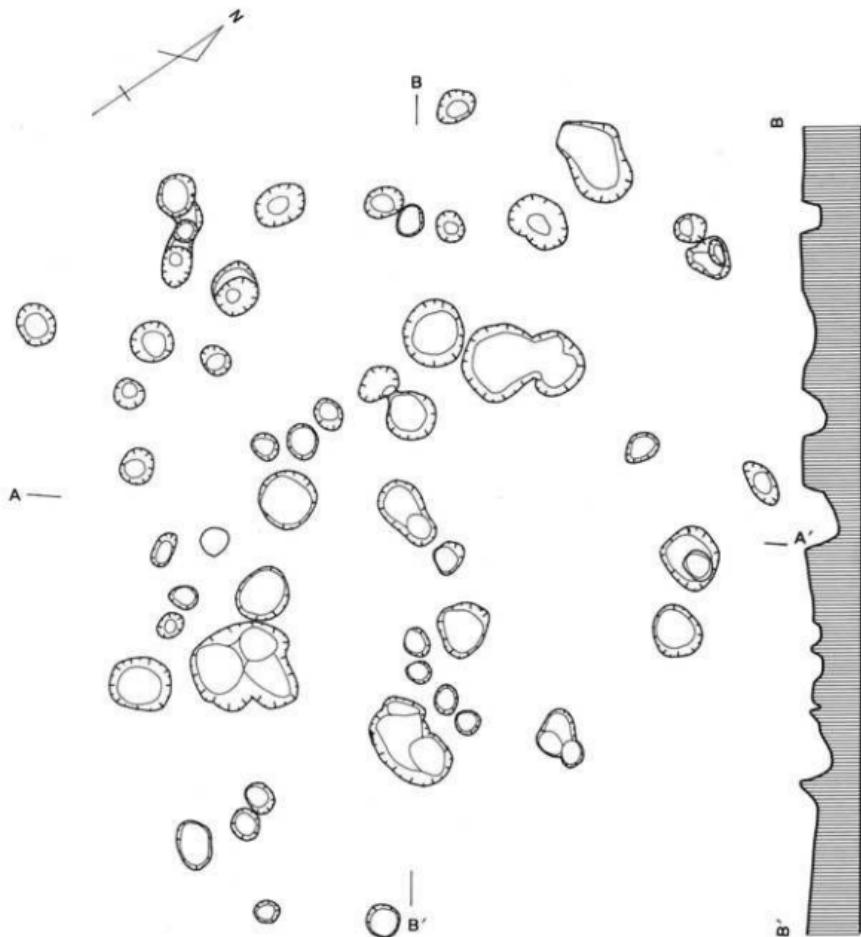
北部遺構実測図



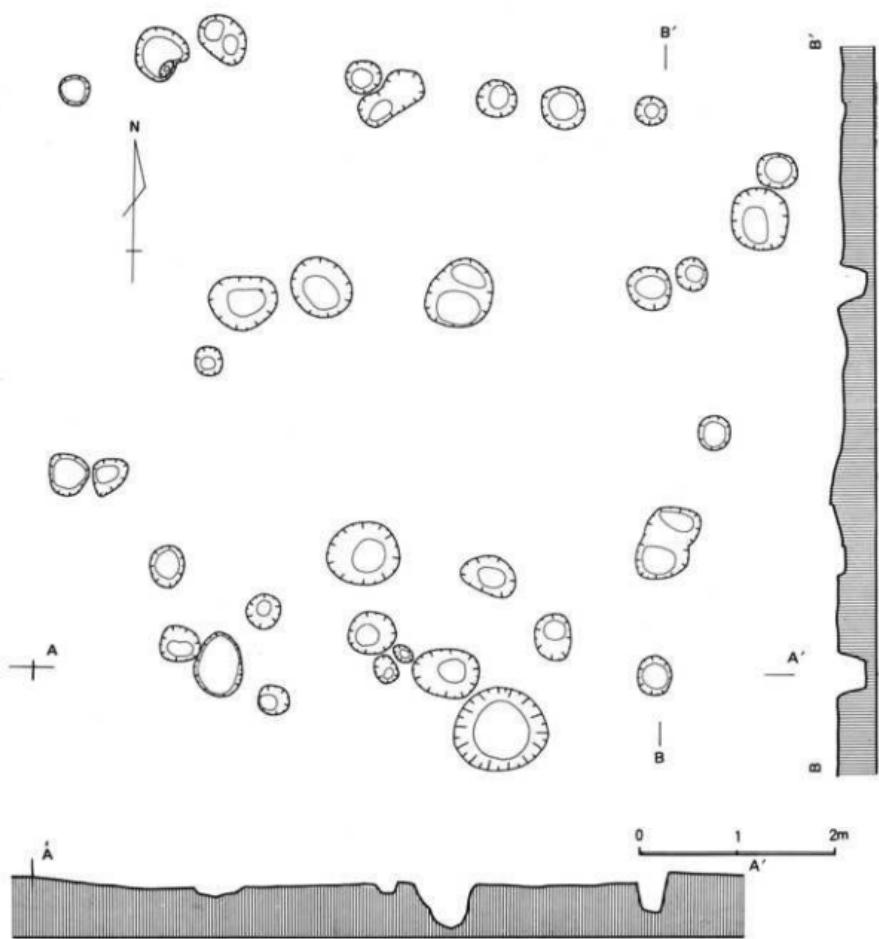
南部遺構実測図



住居跡 1 (SB 001) 実測図



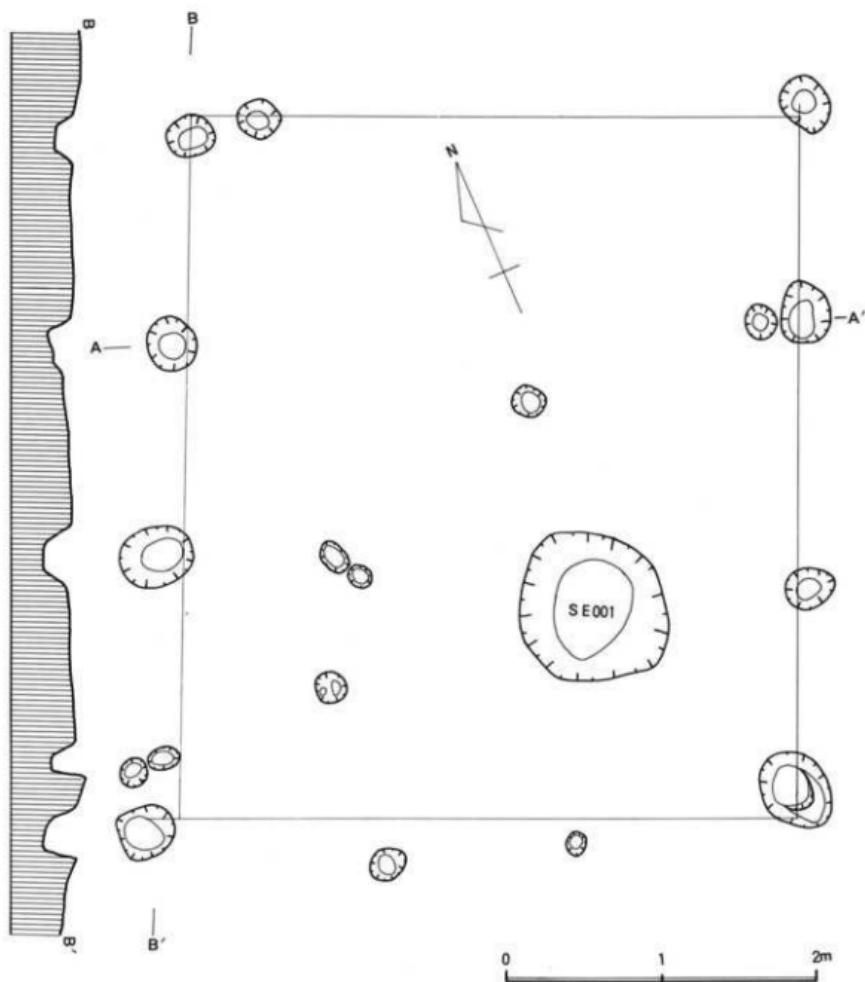
住居跡 2 (S B 002) 実測図



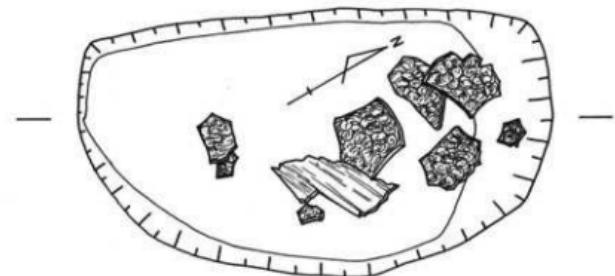
住居跡 3 (SB 003) 実測図



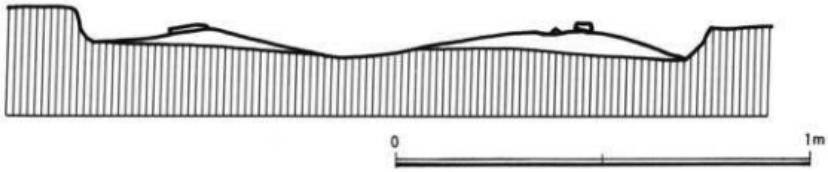
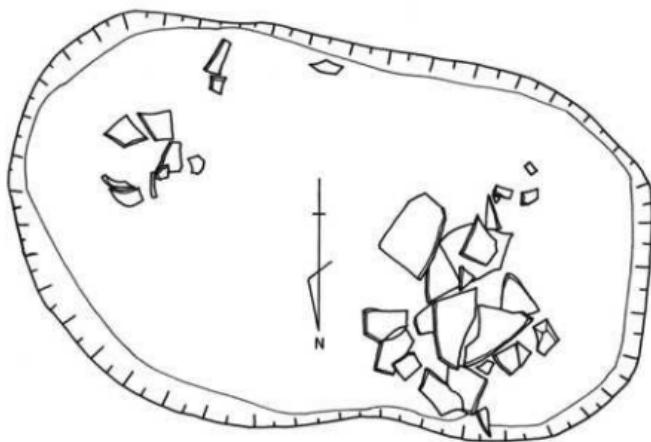
住居跡 4 (S B 004)



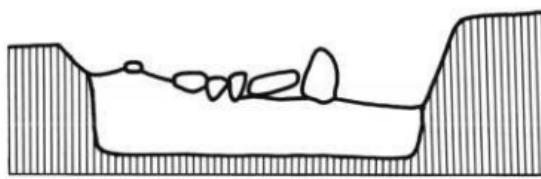
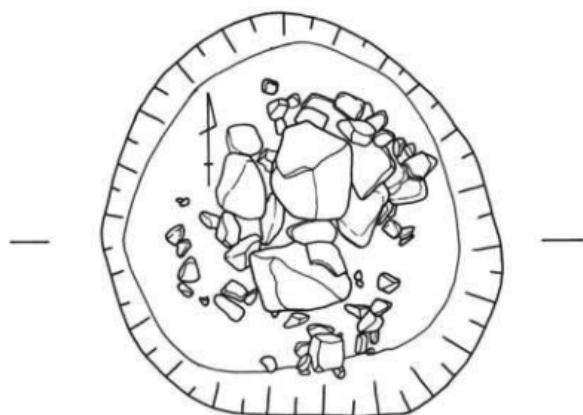
建物 1 (SB 005) 実測図



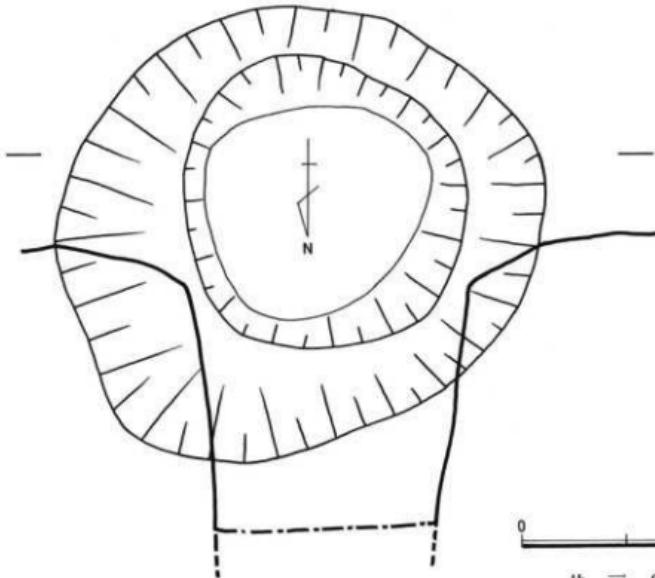
土 壤 1 (SK 001)



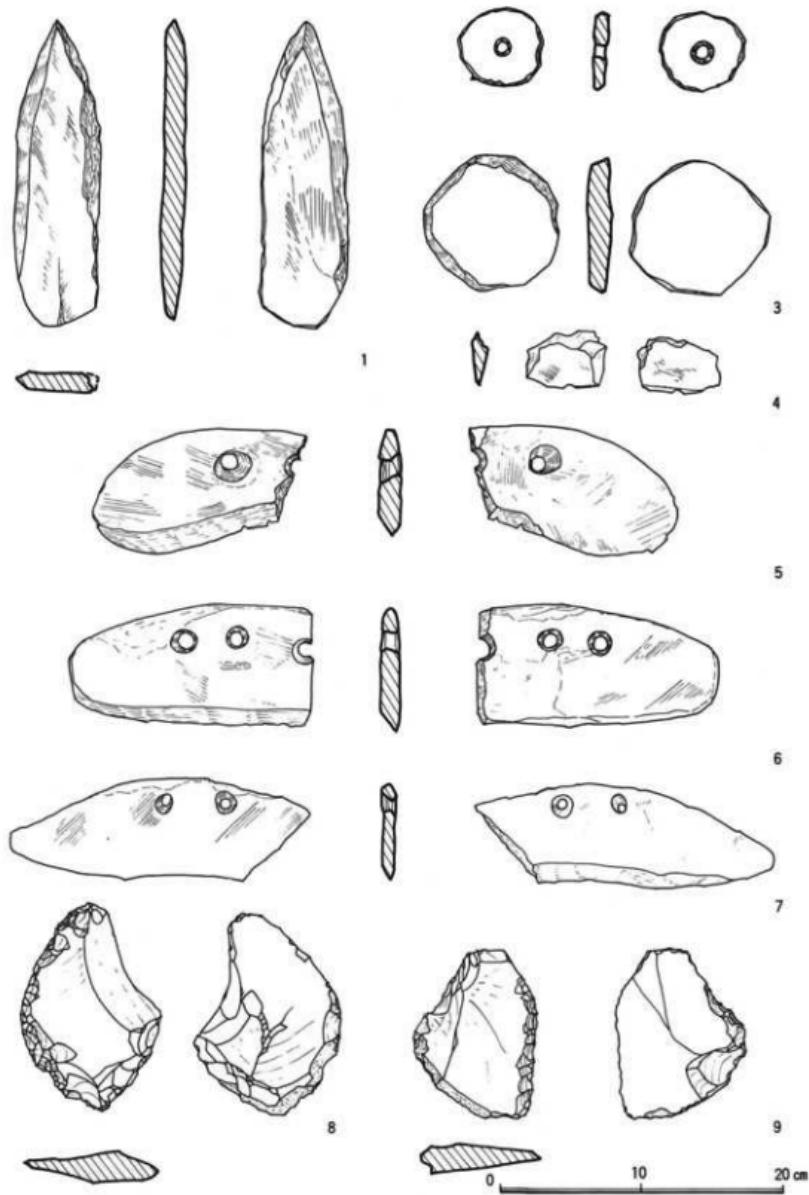
土 壤 2 (SK 002)



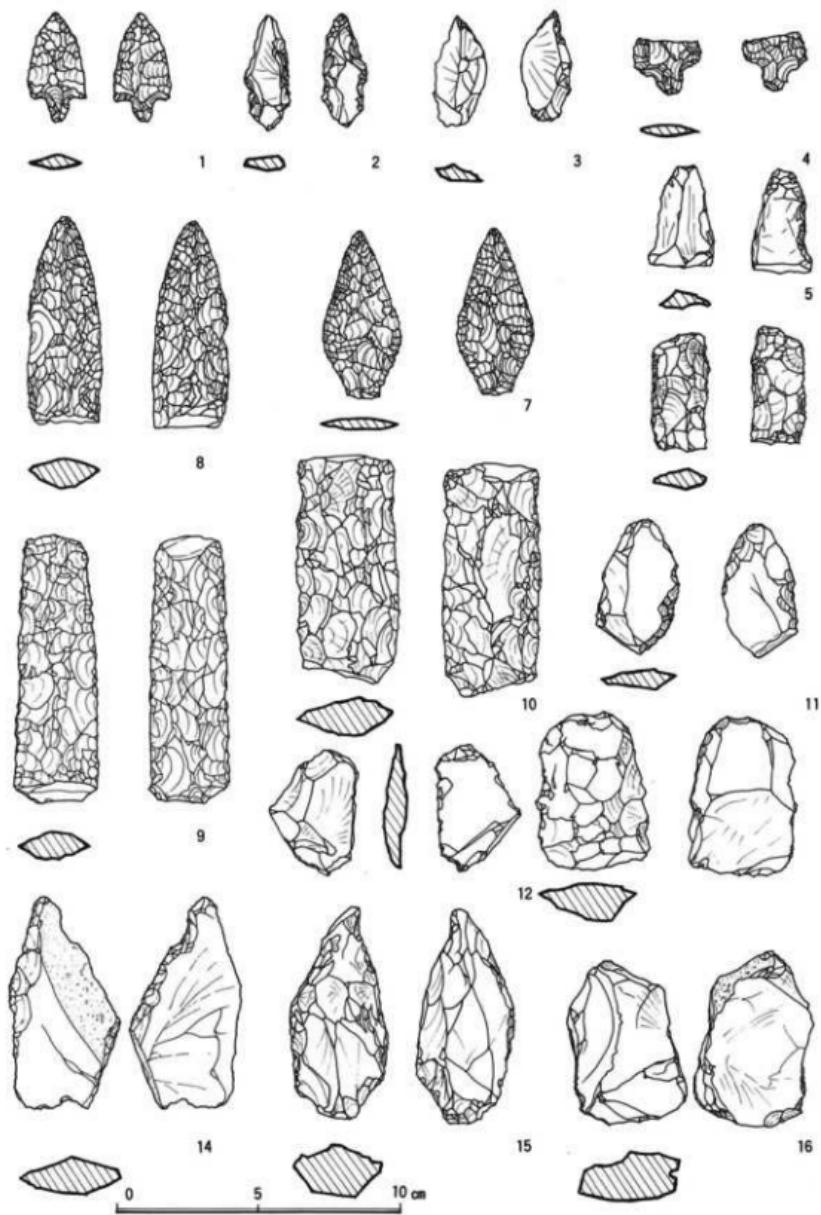
井戸 1 (SE 001)



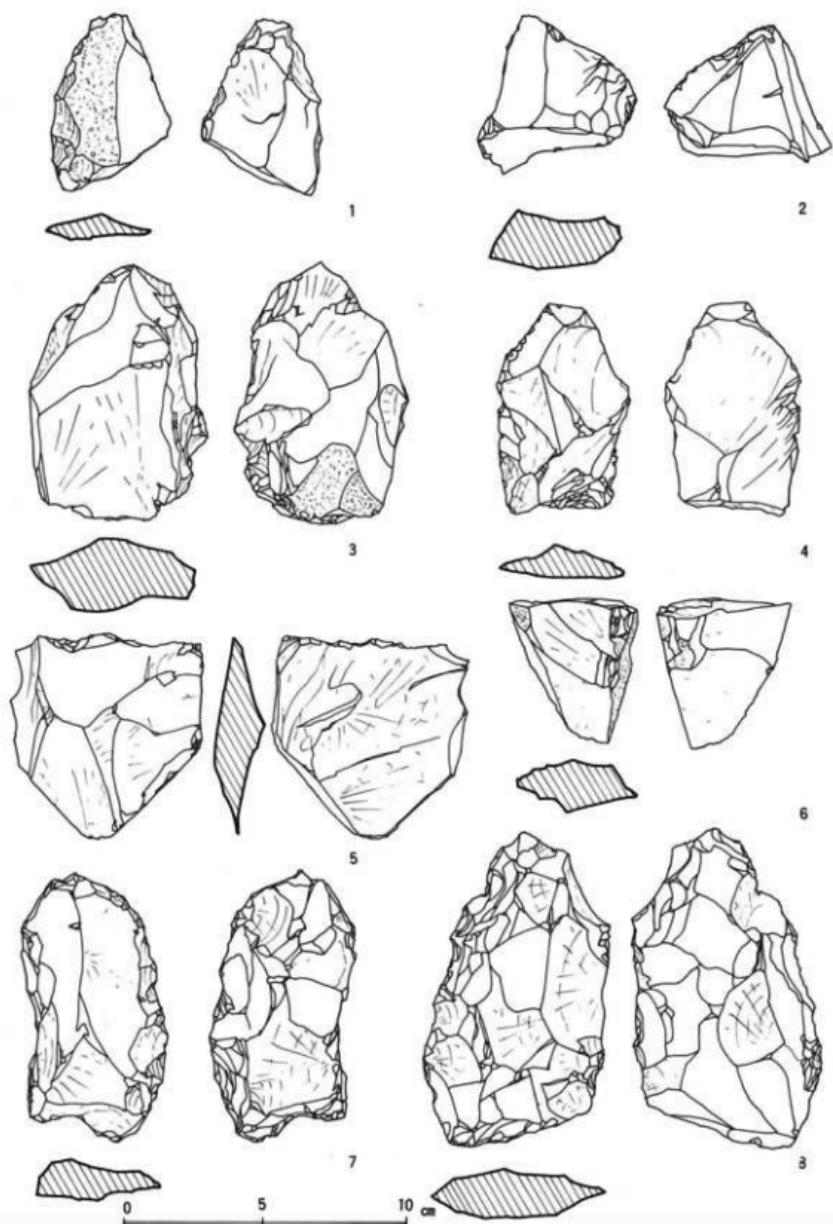
井戸 2 (SE 002)



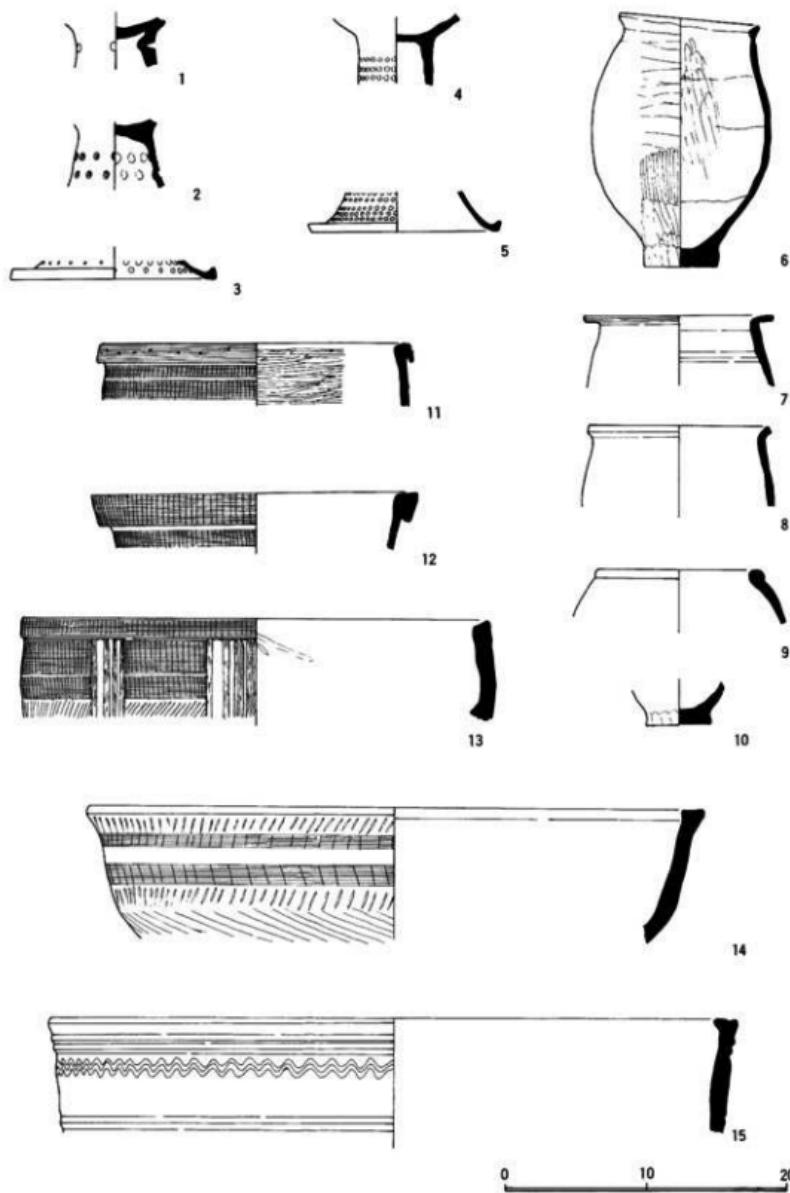
円板状土製品、石劍、石包丁、不定形石器



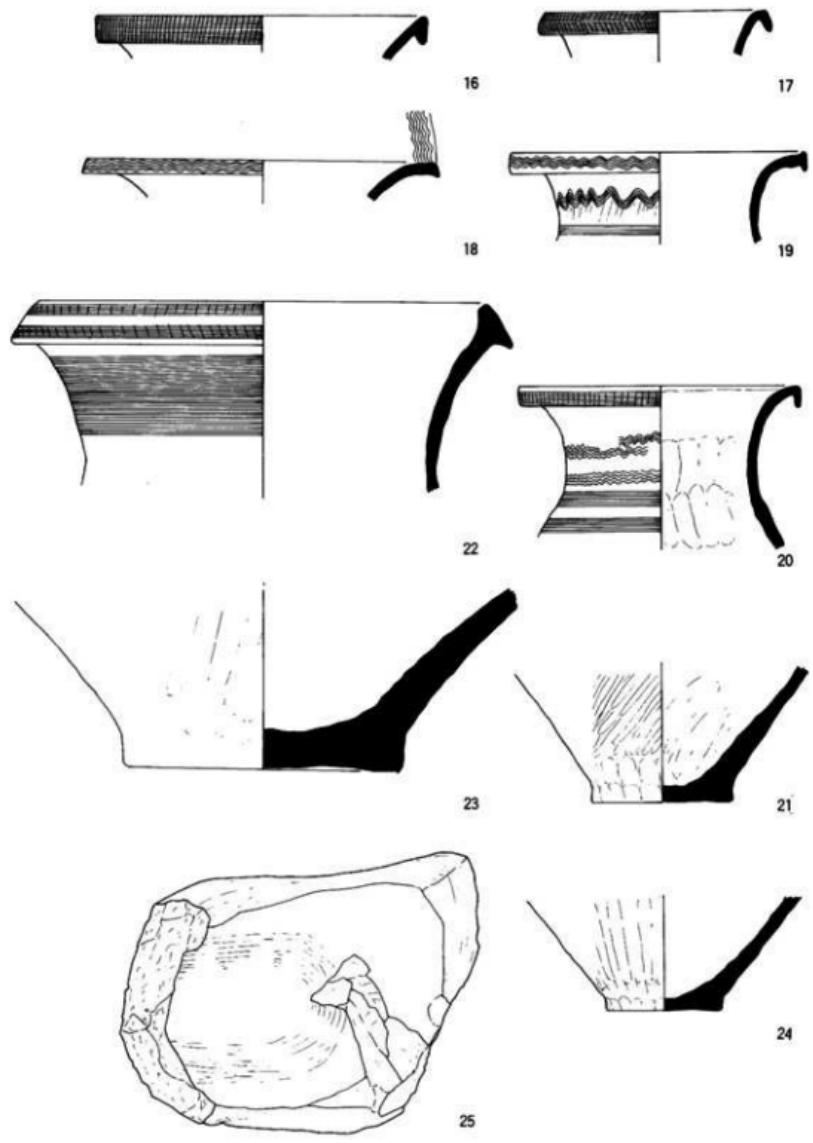
石鐵、石槍、不定形石器



不定形石器、石核、剥片

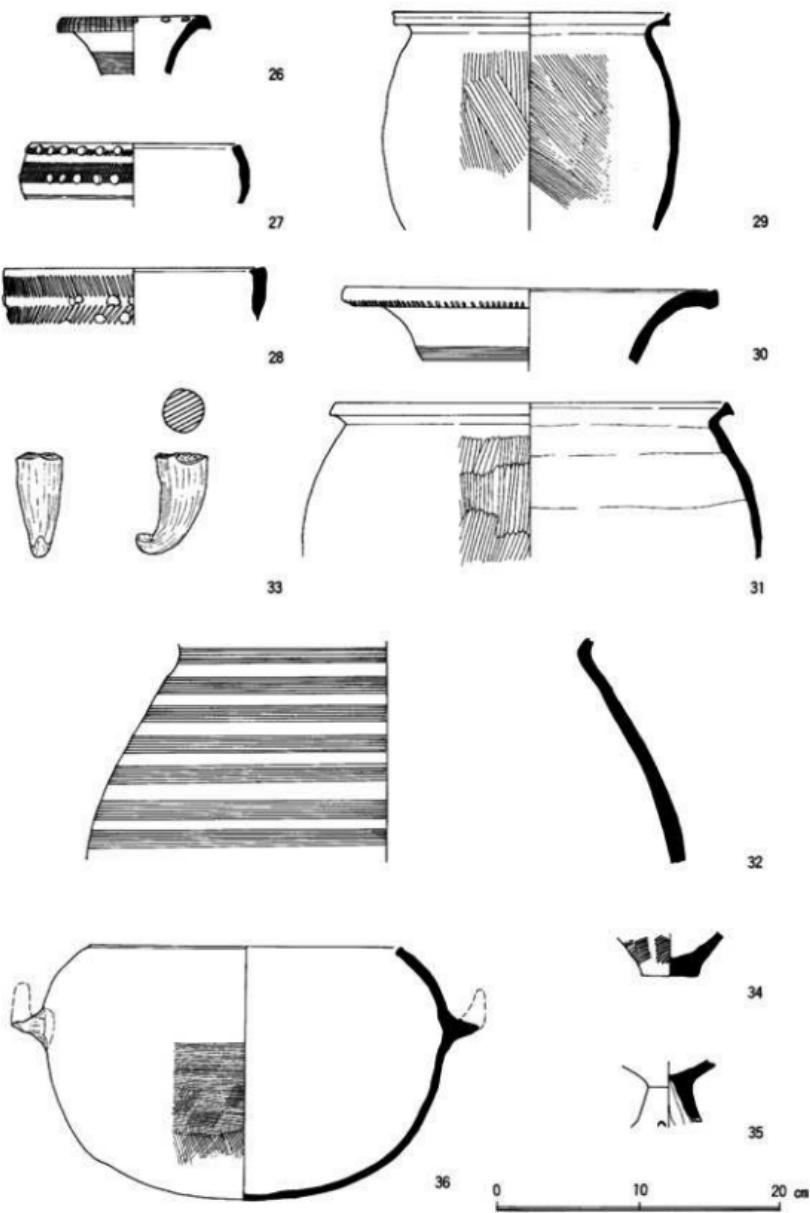


弥生式土器（台付鉢形土器脚部、壺、鉢）

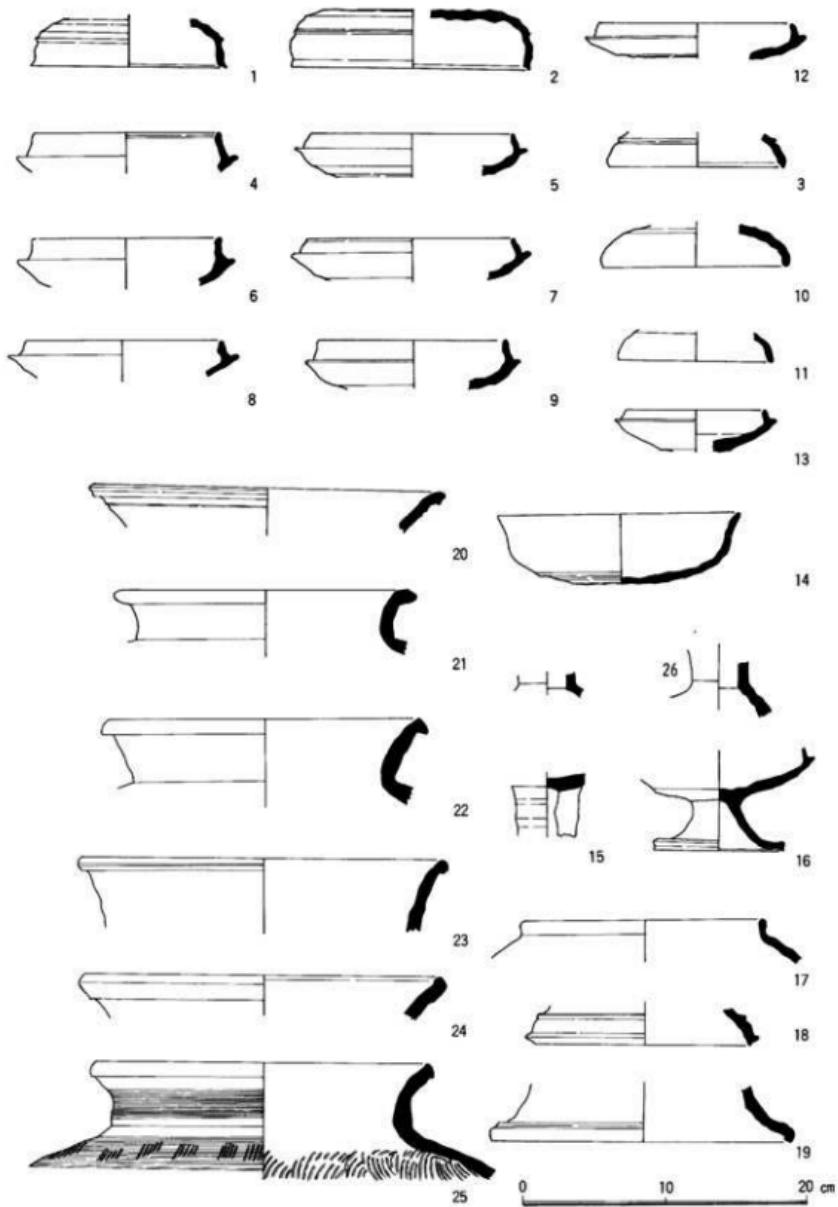


0 10 20 cm

弥生式土器（甕） 砧石



弥生式土器（壺、甕、他）土師器（高杯、壠）



須惠器（蓋杯、高杯、蓋）



遺跡の遠望（南から）



同上（東から）



北部遺構全景（北から）



南部遺構全景（北から）



北部遺構細部（南から）



同上（西北から）



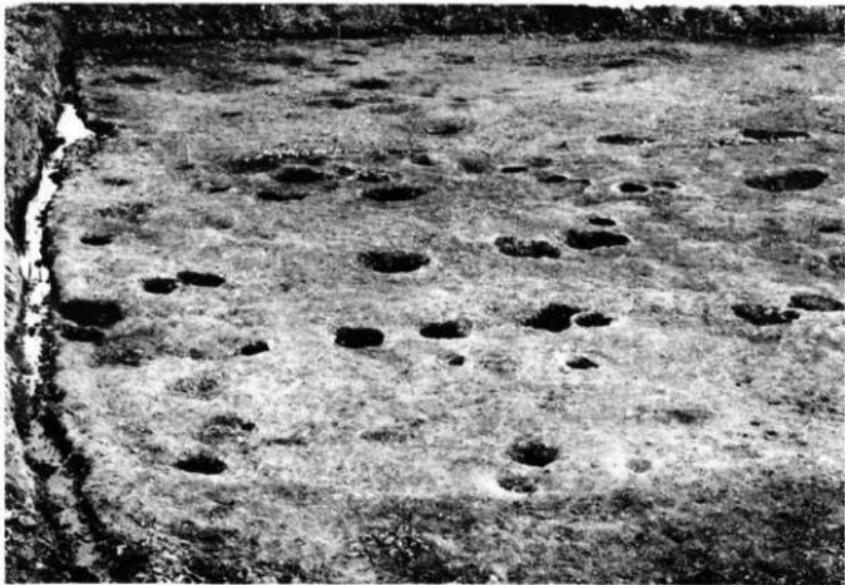
北部遺構全景（西から）



同上 近景（西方部分）



南部遺構全景（西から）



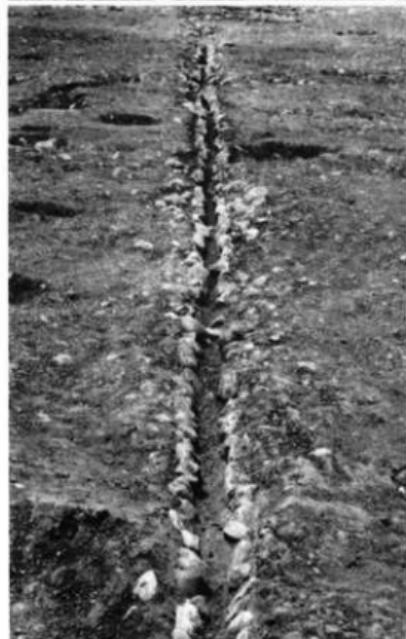
同上 細部（北から）



北部遺構全景



住居址2 (SB 002) 細部



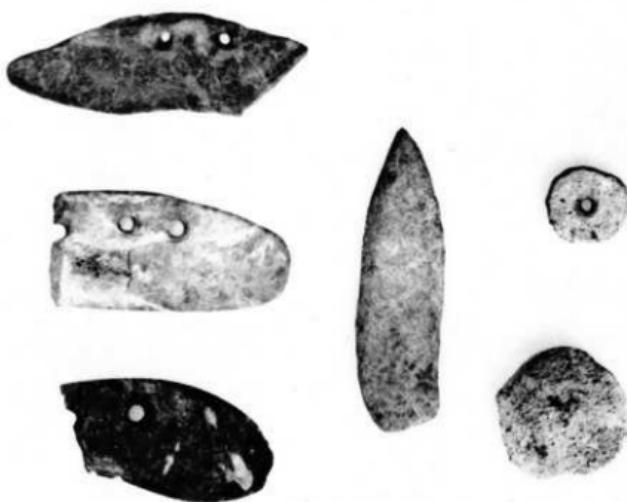
石列西南隅(上)溝(SD 002)被蓋石除去後全景(下左)同左細部(下右)溝(SD 002, 3)



土壤 1 (SK 001)



土壤 2 (SK 002)



石包丁、石劍、円板状土製品（A面）



同上（B面）



石鏃、未製品（A面）



同上（B面）



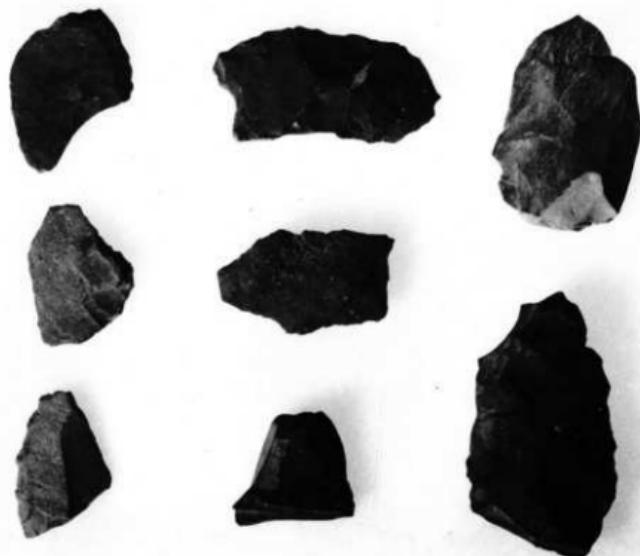
石槍、未製品、不定形石器（A面）



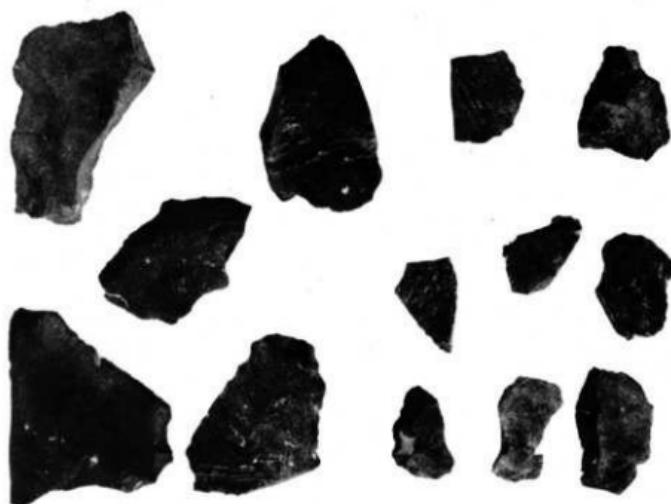
同上（B面）



不定形石器 (A面)



同上 (B面)



剝片など



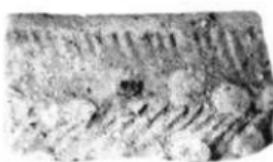
原石、石核など



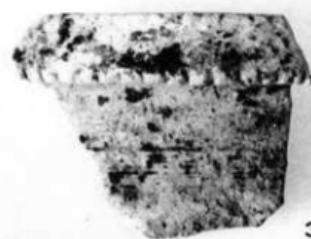
17



16



28



30



26



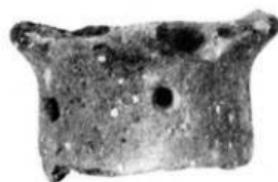
13



31



7



29



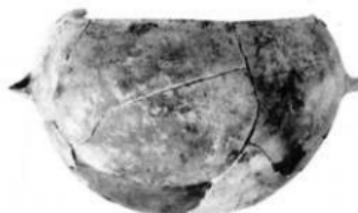
2



6



21



36



1



15



2



22



5



21



7



25

須惠器（蓋杯、高杯、蓋）

中野遺跡発掘調査報告書

昭和54年10月

編著 大谷女子大学資料館 ©

発行 富田林市教育委員会

印刷 白杵印刷株式会社

